明治 43-11

みづゑ

六十九

みづゑ第六十九要目

堤の柳（水彩畫原色版）……大下藤次郎
風景畫法（一）：色彩……石川欽一郎
落葉松（水彩畫原色版）……大下藤次郎
白峰の麓……汀　鳴
朝の富士（水彩畫原色版）……大下藤次郎
春鳥畫談……汀　鳴
關西美術會展覽會を觀る……大下藤次郎
麓の流れ（水彩畫原色版）……大下藤次郎
寄書……問答……讀者の領分……寫眞版數葉

『みづゑ』の發行は私の道樂に過きない。私は多忙なる一ケ月のうち、五日間を此雜誌のために費してゐる。編輯上、讀者諸君に、出來るだけの滿足を與ふべく常に心掛けてゐるが、時も金も不充分であるから思ふやうにはゆかぬ。水彩畫の發展、趣味の普及、共に主なる目的ではあれど、一面には自分の面白づくでやるのであるから、紙上に多少の我儘もあらうが、それ等は大目に見て載きたい。（大下藤次郎）

Burgess

みづゑ

第六十九

明治四十三年十一月二十日臨時發兌

風景畫法 〔一〕

米國畫家ハリソン氏の近著風景畫法は主として油畫に就て講話せるものなり、今其中より水彩畫研究家にも有益なるべき箇處を抜き逐次之を譯出することゝなせり。

石川欽一郎識

色彩

色盲と云つて色の見分けが付かぬ人がある。併し實際上一人として色盲でない者は無い。如何程完全無缺の眼を持つて居ると云ふ人でも當然此宇宙に存在する色數の四半分も見分けることが出來ぬのである。夫れでも先づ太陽の七色の分解でも分かる程の人は仕合はせな方で有るが分解表以外にも澤山ある色の變化に至つては最早見分けることが出來ない。

之は到底仕方があるまい。人間の智識が何程進歩したからとて悉く分かるものではない。尤も數字の方では光線とか音響とかの振動に就ては餘程研究が進んで居る。唱歌の一番高い調子は一吋の間隔に空氣の振動四千回だと云ふことである。人間に分かる最高の音響は振動三萬六千回であると云ふが此以上の振動は迚も耳に分らないのである。色彩の方でもオルトラバイオレットと云ふ色は一吋の間隔で光線の振動六萬一千回である。此以上に振動する色があつても最早眼には感じない。

元來色彩と云ふものは實在するものではない。便宜上斯う名付けたに過ぎぬ。見分けるだけの眼力がない

時には自然は只一色となつて仕舞ふ。柳は綠花は紅と云つた處が實際は是等の物體が光線を反射する振動數の多少に過ぎぬので有る。之が眼に感じて色が見える。即ち色は眼にあるので此眼に感じる力の無い時即ち色盲であるならば見る物悉く單色となつて仕舞ふ譯である。

物體が眼に見えると云ふのは視神經の働きであるが、眼の構造に就ては畫家は學理的に研究するの要はない。既に物が見える様に眼が出來て居るので有るから之に依つて色を見分ける能力を大に養成するのである。畫家としては要するに色が克く見えれば好作品を得られることになる。

併し色の中でも土耳古の織物とか日本の陶器の類とかになると、之は模様であるから綺麗に見せると云ふが目的であるから理屈を以て律することは出來ないが。例へばバンスの『ヴエニス』の夕暮』とかコローの『春の朝』とかのようなものは其色には統一したる照應があり又た斯う云ふ詩趣に富んだ場合を現はさうと云ふ目的で出來たのであるから觀者を感じさせる力は實に強い。

併し之は凡庸畫家では中々出來ぬことであるのは云ふまでもない。御同様の處では是等の大家と肩を伍べるなどは及ばぬ望である。併し乍ら古人の名作に接することは例ひ其人の如く上手には成れぬとも亦大に學ぶ所が有る。先づ初學中色彩の見分けが充分に行かぬ間は成るべく派手な色を避けて穩かな色で落付いた調子に畫くと宜い。私の友人に色盲ではあつたが中々敏腕の畫家があつた。畫も能く賣れたが此人が段々研究する中に自分の色盲であることが分つて如何したならば正しく色が分かるかと種々苦心した末、畫具を黄青紫の三色に屬する色の中より撰んで用ゆることゝ決めた。此三色の範圍内ならば間違はずに見ることが出來たのである。只強い炎處だけに赤や綠を僅かに用ゆることゝしたが初めは中々思ふやうには出來なかつた。幸ひ此人が畫才が充分有つたので筆も面白く位置や調子が毎も佳かつたが。殊に好んで村落とか市街とかを畫いた。之は成るべく綠色を避ける爲で有つたらうが苦心の結果終に成功して名聲上り數多の賞牌を得優遇を受けたのである。之で見ても我心懸げ一つで如何な障害困難にも打

勝てぬと云ふことは無い。

色の種類により感じの強いのも亦弱いのも有る。黄赤朱の如き熱色は毎も強い烈しい色である餘り刺激が強過ぎる時は終には眼が勞かれる。赤を牛に見せれば怒ることは人も知る如くであるが其他の動物も皆多少赤を嫌ふのである。婦人が赤い裾を飜へして鶏を飼養する柵内に入るときは鳥は皆逃げて側へ來ぬのである。人間には穏和なる赤は寧ろ快感を與へるが烈しい赤は迚も耐へられない。綠の山川が若し色を變へて赤となり赫々たる日光に燃立つやうな有様であつたならば人間は皆發狂してしまうであらう。之に反して青綠紫のような涼しい色は皆穏やかな色である。自然の風景が是等の沈靜なる色から出來て居ると云ふことは申し分の無い處である。室内の裝飾でも配色は毎も此種の色を用ゐ、只此處其處に全體の調和を締める爲めに赤黄又は朱を交ぜるに過ぎないとは裝飾家の云ふ處であるが畫も亦此通りである。コローが涼しい綠色の風景を畫いて其中に赤い帽子の田舍女を添へてあるのが畫を誠によく引立たして居るのを見ても分かる。

色彩は前にも云つた通り生理上充分の研究は中々容易のことでは無い。併し全體から見て美術上今日まで進歩の迹を考へるに何よりも色彩が一番研究を經進歩もして居るようである。畫室内の光線は靜かな落付いたものであるが一歩畫室外に出る時は派手な強い光線となる。之が我々の研究すべき好題目であるが此題目の基である色の組立が昔の畫家の見た處とは今は正反對になつて居る。畫室内の光は窓より來る靜かな光であるから明るい部分は寒く暗い部分は暖かである。戸外の光は此反對で明るい部分が暖く暗い部分が寒い。之は日向は太陽の黄色い光線を受けるから暖くなるが日陰は室の反射て寒くなる。夫故戸外で寫生をやつた最初の風景畫家は大に惑つたに違ひない。畫室内の色で來る古い畫法では間に合はぬことが分つたらうが容易に之を改良することも出來無い。コローのような大家でもあの時代の色とも云ふべき暖い褐色で陰を畫いて居る。併し戸外の色を出さうとして其上から紫がゝつた灰色を掛けて

は居るが下の褐色が段々透いて見えて來て居るのがコローの畫に多いのである。

其後外光派が現はれて以來畫法一變して漸く舊態を改めるに至つたのである。尤も今の外光派の遣り方は七色の分解を點や線で現はすのであるが將來此方法をも亦改良するの日が必ず來ることゝ思ふ。兎に角に今日の畫界に於て用色に新生面を啓いたことは之を外光派の功に歸せざるを得ない。

將來には色彩の方面に如何なる革新を來たすべきか今に於て斷言することは出來ないが。苦し數理の方面に進歩するときは色の配合が數學的に出來るようになるかも知れない。併し學理上には何程進歩したからとてそれで美術品が出來る譯には行かぬ。即ち藝術には個人の性格と云ふものが關係する。個人性なければ眞の藝術は存在せぬのである。私の知己なる音樂家は數學を應用して音樂の曲を微妙に表はせると云つて連りに研究して見たが其結果は何の役にも立たないものであつた。此筆法で仕舞には機械で美術品を製造すると云ひだす者も出るかも知れないが迚もそんな譯に行くものでは無い。

畫の品位(中村不折氏＝中學世界)

假りにこゝに一つの畫がある、感情もよく出てゐるし物質もよく描かれてゐるし色彩濃淡もまた如何にも巧妙である。併し若し其畫にして品位なくばそれは何等の價値ないものと云はれる。かく品位は以上の諸技巧の上に位して、技術としては一番尚いものとなつて居る。

雪舟の作品を、今の畫家が描く巧妙な畫に較べると、無技調で價値なきものゝ如くに思はれるが宜く比較して見ると、超然として一段高い處にあるやうな感がある。それは雪舟の繪には品位があるからである。如斯品位の如何は實に其繪の價値を定めると云はねばならぬ、從つて品位といふことは非常に尚まれるが是れが又出來難い事である。

若し畫家にして其人格が低かつたら、如何に努力しても作品の品位は出來ないものである。

は居るが下の褐色が段々透いて見えて來て居るのが眞に美しいのである。

其後外光派が現はれて以來畫法一變して漸く舊態を改めるに至つたのである尤も今の外光派は七色の分解を點や線で現はすのであるが將來此方法をも亦改良するの日が必ず來ることは疑ふ角に今日の畫界に於て用色に新生面を啓いたことは之を外光派の功に歸せざるを得ない。將來には色彩の方面に如何なる革新を來たすべきか今に於て斷言することは出來ないが。苦し數理の方面に進歩するときは色の配合が數學的に出來るようになるかも知れない。併し學理上には何程進歩したからとてそれで美術品が出來る譯には行かぬ。即ち藝術には個人の性格と云ふものが關係する。個人性なければ眞の藝術は存在せぬのである。私の知己なる音樂家は數學を應用して音樂の曲を微妙に表はせると云つて連りに研究して見たが其結果は何の役にも立たないものであつた。此筆法で仕舞には機械で美術品を製造すると云ひだす者も出るかも知れないが迚もそんな譯に行くものでは無い。

畫の品位（中村不折氏『中學世界』）

假りにこゝに一つの畫がある、感情もよく出てゐるし物質もよく描かれてゐるし色彩濃淡もまた如何にも巧妙である。併し若し其畫にして品位なくばそれは何等の價値ないものと云はれる。かく品位は以上の諸技巧の上に位して、技術としては一番尚いものとなつて居る。

雪舟の作品を、今の畫家が描く巧妙な畫に較べると、無技巧で價値なきものゝ如くに思はれるが宜く比較して見ると超然として一段高い處にあるやうな感がある。それは雪舟の繪には品位があるからである。如斯品位の如何は實に其繪の價値を定めると云はねばならぬ、從つて品位といふことは非常に尚まれるが是れが又出來難い事である。

若し畫家にして其人格が低かつたら、如何に努力しても作品の品位は出來ないものである。

T. OSHITA 09

白峰の麓

汀鷗

一

小島烏水氏は甲斐の白峰を世に紹介した率先者である。私は雑誌『山岳』によつて烏水氏の白峰に關する記述を見、その山の空と相咬む波狀の輪廓、朝日をうけては紅ゐに、夕日に映えてはオレンヂに、旦暮刻々其色を變へてゆく純潔なる高峰の雪を想ふて、いつかは其峰に近づいて、其威嚴ある形、其麗美なる色彩を、わが畵幀に捉ふべく、絶えず機會をうかゞつてゐた。』私が白峰連嶺を初めて見たのは、四十一年の秋、甲州山中湖に遊んだおりで、宿雨のやうやく霽れたあした、湖を巡りて東の岸に立つた時、地平線上、低く西北に連なる雪の山を見た、白峰！と思つたが、まだ疑ひはある、ポケットから地圖を出す、磁石を出す、そして初めて白峰！と叫んだ。今自分の立つてゐる處からはよく見えぬ、私は岸を東へ〳〵と走つた、やがて道は盡きた、崖と水とは相接して足かゞりは僅かに數寸、私は辛ふじてそこをも通つた、岩を傳はつた、樹根に縋つた、からして往けるだけ往つた、そしてさゝやかなる平地に三脚を据へて、山中の湖に浮べる如きなつかしき白峰の一部を寫したことがあつた。

翌年の三月某日、これも雨後の朝、鎌倉にゆく途中、六鄕鐵橋の邊から、再び玲瓏たる姿に接した。描きたい、描きたいといふ念は、一層深くなつた。

白峰を寫すには何處がよからう、十重二十重山は深い富士のやうに何處からも見えるといふ譯にはゆかぬ、地圖を調べ人にもきいた、近く見るには西山峠、遠く見るには笹子峠、この二つが一番よいやうである、私は五月某日、終に笹子に向つた。

初鹿野で汽車を下りて、驛前の哀れな宿屋に二晩泊つたが、折あしく雨が續くのでそこを去つた、そして其夕、甲府を經て右ウ左口（バグチ）にゆく途中で、亂雲の間から北岳の一角を見て胸の透くのを覺えた。

翌日は右左口峠を登りつゝ、雲の間から連峰の一部をちら〳〵見た、峠の上では急いでスケッチもした女阪峠を上る時も片鱗はいく度も見たが全形を眺むることが出來なかつた。

精進を過き本栖を發（た）つて駿甲の境なる割石峠の邊から白峰が見える。霞たつ暖かい日で、山は空と溶け合ふて、やゝともすれば其輪廓を見失ふ程、杳かに、そして幽かなものであつた。

二

甲州西山は、白峰の前岳で、早川の東、富士川の西に介在せる、四五千尺の一帶の山脈である。此峠に立つたなら、白峰は指呼の間に見えやう、信州德本（トクゴ）峠から穗高山を見るやうに、目睫の間にその鮮やかな姿に接することが出來ないまでも、日野春から駒ヶ嶽に對する程の眺めはあらう、早川溪谷の秋も美はしからう、湯島の溫泉も愉快であらう、西山へ、西山へ、畵板に紙を貼る時も、新しく繪具を求むる時も夜毎の夢も、まだ見ぬ西

山の景色や白峰の雪に想ひを馳せてゐた。

東京を發つたのは十一月一日少しく霧のある朝で、西の空には月が掛つてゐた。中野あたりの麥畑が霞むで、松二三本、それを透して富士がポーと夢のやう、何といふやさしい景色だらうと、飽かず眺めつゝ過ぎた。小佛、與瀬、猿橋、大月と、このあたりの紅葉はまだ少し早いが、いつもは詰らぬ處でも捨てがたい趣を見せてゐる。

長いトンネルを出ると初鹿野、こゝから鹽山迄の間に白峯は見える筈だ、席を左に移して窓際に身をピツタリ。

果然、雪の白峰連嶺は、飽く迄蒼い空に、クツキリと其全身を露はしてゐる。水の垂れさうな秋の空、凍つたやうな純白の雪、この崇高な山の威靈にうたれて、私は思はず戰慄した、袂にスケッチブックのあることを忘れた、もう西山迄ゆかなくともよいと思つた。

雪の山はトンネルのために、幾度となく隱れまた現はれた、その度ごとに、私は曇つたガラスを拭いて、瞬時でも見逃がすまいと眸を凝らした、三度ヵ度、つひには全く其姿を失ふて、車は大なるカーブを畫き、南の方無格恰な富士の頂を見た時、夢から醒めたやうな思ひがした、そして此時ほど富士山を醜く見たことはない。

十二時半に甲府に着いて、直く鐵道馬車の客となつた、今にも壞れさうな馬車だ、馬は車に馴れず、動かじと佇むかと思ふと、また俄かに走り出す、車の右は西山一帶の丘陵で、其高低參差たる間から、時々白い山が見える、南湖の手前で少しく川に沿ふて堤の上をゆく、咲殘りの月見草が詫しげに風に動いてゐる、柳は錆た色をしてこれも風に靡いてゐる、チヨット景色のよい處だと思つた。

靑柳といふ町を過ぎる。近きにお祭りがあるといふので、軒提灯を吊して美はしく飾つてゐた。

形面白き柳の巨木の、水に臨むで、幾株か並むでゐる廣い河原、そこに架けたる手褶なき長い橋を渡ると鰍澤の町だ。私は右側の粉奈屋といふ旅店に投じた、丁度三時半。

二階から富士が見える、やはり形が悪い。富士の美しいのは裾野が展いてゐるからだ、裾を隱して頂だけでは、尖端鋭き金峰山などの方が遙かに美しい、富士は頭を隱してもよい、裾野は隱れてはいけない。

宿の背後は直ぐ山で、社やら寺やら、高地に建物が見え、樹が繁つてゐる、紅葉の色もよい、山上の見晴しもよからう。

番頭に明日西山行の人夫を賴む、女中のお竹さん、西山の景勝を說く事極めて詳、但し湯島近處から雪の山が見えるとは云はないので、少しく心許なく思ふ。

隣家の素人義太夫をきゝながら夢に入る。

三

翌朝五時半には、私共は粉奈屋を發つた。空は薄く曇つてゐるが、月があるので明るい。新しい草鞋に、少しく濕つた土を踏むでゆく心持はよい。細い流れに沿いてゆく、鼠色の柳が水を覗

いてゐる、道は少し宛の上りで、澤を渡り田の畔を通る、朝仕事にゆく馬を曳いた男にも逢ふ、稻を刈りにゆく赤い帶をした女にも逢ふ、空は漸く明るくなつて時々日の目をもらす。

往手にあたつて黑い大きな門が見える、刈つたばかりの稻束が、五つ六つ柱によせかけてある、人夫は『これが小室の妙法寺で、本堂は一二年前に燒けました、立派なお堂だつたが惜しいことをした』と言ふ。門へ入る、兩側に人家がある、宿屋もある、犬が連りに吠える。

山門を潛つたが、奥にはゆかず、道を左に取つて山田の畦をゆく、家の形も面白く、森や林の姿もよい、四五日の材料はあらうと思つた。

道は漸く急になる。右に左にうねりつゝ登る。上には松に吹く風の音、下にはカサコソと落葉を踏む音、それのみで天地は極めて靜である。空は次第に晴れて來て、ジリ〳〵と背を照らす日は暑い、汗で身體は濡れる、外套を取つて人夫に持たせる、上衣を脫いで自分で持つ、峠の曲り角では必ず休む。

かなり高く登つた。振向いて見ると、富士はいつの間にか姿を出してゐる、甲府盆地で見た時とは違つて雄大の感があろ。麓の方一條の白い河原は、富士川で、淡く煙りの立つあたりは鰍澤だと人夫は指す。

道の傍に小さな池がある、七面の池といふ、枯蘆が茂つた中に濁つた水が少し見える、このあたりは落葉松の林で、葉は僅かに色づいて。ハラ〳〵と地に落ちる、暗い綠の苔と、そして細かき落葉で地は見えない、その上を步むと、輕く彈かれるやうでしつとりした感じが爪先から腹に迄も傳はつて來るやうだ。』

池を離れてからは、短かい雜木や薄の山で、日を遮るものが無く、暑さは前にも增して烈しい。人夫の間違で、草刈道を三四丁迷ひ込んで跡へ戻つた時は、少々忌々しかつた。處々樅の大木がある。富士はいよ〳〵高くいよ〳〵大きく見える。

鰍澤から步むこと三時間半、道程三里にしてデッチヨーの茶屋といふのに着いた、峠の頂上で、出頂とか絕頂とか書くのであらう。茶屋は少し山蔭の平地に在つて、只一軒の穢ない小屋に過ぎない、家の前には、近處の山から採つて來た雜木が盆栽的に並んでゐる、眞暗な家の中には、夫婦に小供二三人住んでゐる、この子達はどうして學校へゆくのだらうと氣になる、暗い中に曲物（マゲ）が澤山ある、栗で飴を造つて土產に賣るのださうな、握り飯を一つ片づけ、澁茶をすゝつて暫らくこゝに休む。

四

茶屋から先は下り一方ではあるが、久しく步行かぬ爲めか、足の運びが鈍い、爪先が痛む、コムラが痛む、膝節がいたむ、腿がいたむ、終には腰迄も痛む、今からコンなことではと氣を鼓しつゝ進む。

道は山の裾に沿ふて、たえず左に暗い谷を見ながらゆく、掩ひ冠さるやうに枝を延してゐる紅葉の色の美はしさは、比ぶるにものがない。前には常磐木の繁れる源氏山が聳えてゐる。後ろの方は今來た道を、遠く富士が頂きを見せてゐる。源氏山の中

腹を過ぎると、早川に沿ふた連峯が眼前に展開され、杳かに水の音がきこえる。細い白樺もチラホラ見える、草山の出鼻を曲ると、やゝ曇つた西の空に、蝙蝠傘を展げたやうな雪の山が現はれた。

待焦れた雪の山、私の足は地から生えたやうに動かなくなつた。前には華やかな色の樺の若木が五六本、後には暖かい鼠色をした早川連嶺が、二重三重と輪廓を畫く、その上から顔を出してゐる雪の山、白峯！白峯！

人夫は其名を知らなかつた。地圖も見たがあまりに南へ寄つてゐるので北岳ではない、農鳥でもない、大井川を超えて赤石が見えるのかとも思つた、後に聞いたら赤石山系の惡澤岳であつた。

私共のゆく道は新道て、舊道七曲峠の方からは白峯も可なりよく見えるといふ、それを樂しみに歩を運んだ、急坂を下ると河原に出る、橋を渡つてまた水を遙かの下に見て、曲り〳〵て北を指してゆく。

溪の水音が遙かにきこえる、對岸に幾棟かの藁屋根が見える、そこは上湯島だといふ、長い釣橋が一直線に見える、樫や山桐や桑や、人の植えた木が道に沿ふてちらほら見える、燒畑には哀れな粟や豆が作られてある、村人が三三五々それ等の穀物を刈つてゐる。豆がらを燒く煙りが紫に立昇つて、鼠色の空にうすれてゆく。

『もう一里ほどです』と人夫は言ふ、道は細く、山から辷り落ちた角のある石の片けが、土を見せない、急な下り道では、足は石車に乘つて、心ならずも數間を走らねばならぬ。人夫の脊負ふてゐた私の寫生箱は、いつか細引の縛めを逃れて、カラ〳〵と左の溪へ落ちた、ハツと思つて下を覗くと、幸ひに十數間の下で樹の根に遮れて止まつてゐる、崖は傾斜が急で下りられない、大迂回をして漸く捨ひ上げたが一時は吾事終れりと悲觀したのであつた。

川に近く下つて、右に曲ると、上り坂た、湯川の水の音は耳を聾するやうである、見上げると三階建の大きな家がある、右の崖の上にも新しい家が見える、前なるは古湯で後なるは新湯、私は新湯の玄關に荷物を下させた。

五

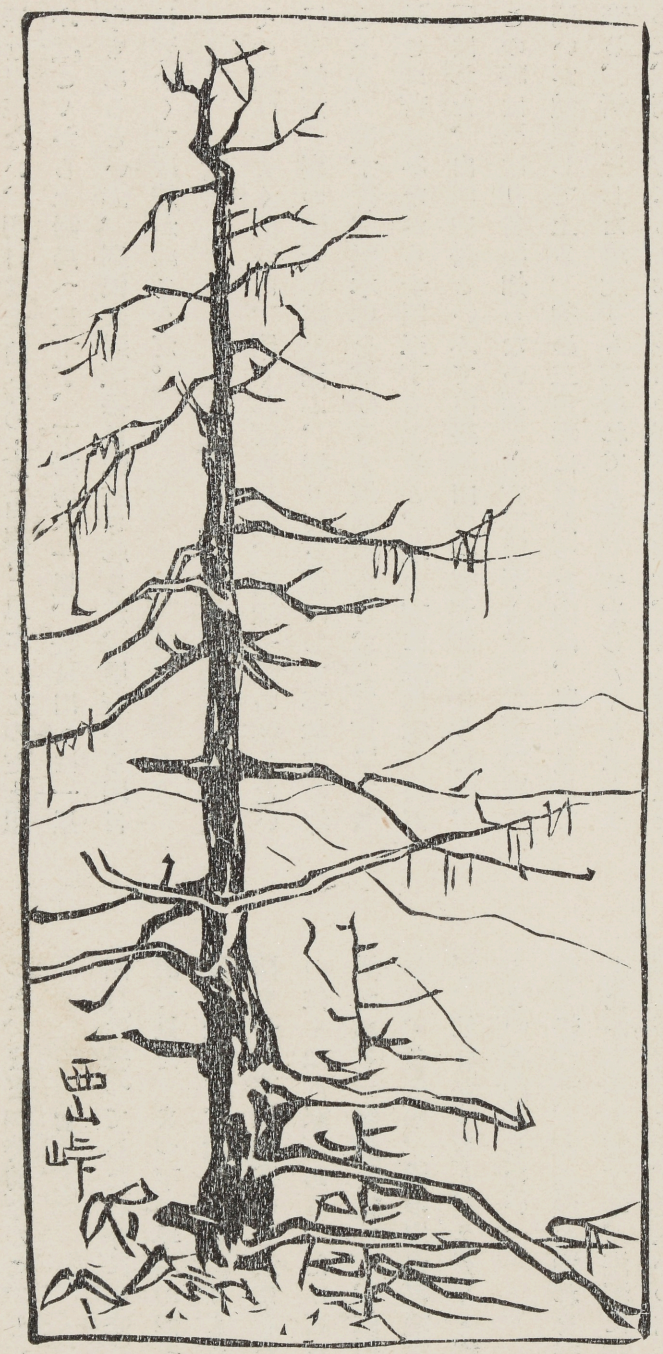
紺の裾短かな着物を着た若い女中が出て來た、黒光りの長い緣側を通つて、初めに見た新しい二階の一室に入る、天井の低い、壁のない、疊の凸凹な、極めて粗末な部屋だが、新しいので我慢も出來やう、主人はやつて來て『小島サンも此室に御泊でした、此夏山岳會の大勢の御方の時は、こゝと隣りの部屋とに居られました』と語る。親しい友の、幾夜さかを過した座敷かと思ふと何となく懐かしい。

着いた時に、パツと明るく障子に射してゐた午後二時の日の光りは、三十分もたゝぬうちに前の山に隱れて了つた、いまはまだ一日に一時間位ひ、この谷に日は照らすが、冬になると全く日の目を見ないさうだ、さぞ寒からうと思ふ。

浴衣を貸してくれる、珍らしくも裾は踵まである、人並より背の高い私は、貸浴衣の丈けは膝迄と極まつたものと、今迄思つてゐたのだ。

浴槽は入口の近くに在つて、五六坪もあらう、中を二つに仕切つてあつて、湯は中央のあたりに、竹樋から滔々と落ちてゐる、玉を溶かしたやうに美しいが、少し微温いので、いつ迄も漬つてゐなくてはならない、流し場もなければ桶一つない、あたりに水も無い雑風景なものだ。

湯は微温でも風邪にはかゝらぬと宿の人は保證する、風邪の時も湯に入ると治りますといふ、そして近在から來てゐる二三の湯治客は、幾度も〳〵湯に入り、いつまでも〳〵湯の中に居るのである。



長火鉢、之れはこの火鉢が出來て以來、中の灰は掃除したことがあるまい、吃度無いと請合へる位ひの穢なさだが、火も炭も惜氣もなく澤山持つて來られるのは、肌寒き秋の旅には嬉しいものゝ一つである。宿から出してくれた氷がけの茶受には手は出ない、持參のコニアを一杯飲むで、湯上りの身體を横たへた時はよい心持だつた。

縁に立つて西の方を見ると、間近く山が逼つて來て、下の方遙かに早川の水が僅かに見える、湯川に架れる釣橋も見える、紅葉はまだ少し早く、崖の下草のみ秋の色を誇つてゐる、裏の窓を明けると、目の下に古湯の建物が見え、その背後に湯川が瀧のやうに落下してゐる、南の方からも水は來て、直ぐ窓の下を轟々と音たてゝ流れてゐる。溪は狭い、信州上高地のやうに、湯に漬りながら雪の山を見るといふ贅

澤は出來ない、明日は七曲峠の上で白峯を見たいものだと思ふ。』こゝから上湯島へ三十丁、下湯島へ一里、奈良田へは一里半もあるといふ、郵便は近頃毎日配達されるが、甲府から四日目でなくては着かぬさうだ。

六

その夜は快よく眠つた、明くれば天長節、滿空一點の雲もない好天氣だ、裏の瀧壺で顏を洗ふ、握り飯を腰にして平林道の峠を上る、數十折、雜木林を拔けると燒畑がある、また林に入る、暑さに苦しみながら十四五丁も上ると、北の方に忽然雪の山が現はれた、白河内岳といふて白峯連山の一部であるさうだか、この時はやはり名を知らない。高く上れば多く見える譯だ、脚は痛いが勉强して上る、初め三角形に白かつた山は、肌が見えて來る、赭色をした地辷りも露はれてくる、モ少し〳〵と上るうちに、南の方にもまた一つ白い峯が顏を出す、これは昨日見た惡澤岳だ、更に上り上つて、終に一里あまりも來て、大きな山毛欅を前景に、三四時間ばかり一生懸命に寫生をした。

日は南へ廻つて、雪の蔭は淡くコバルト色になる、前岳は濃いオルトラマリンに變る、近くには半ば葉の墮ちた巨木の枝が參差としてサルオガセが賴りなげにかゝつてゐる、朝から人にも逢はぬ、獸も見ぬ、鳥さへも啼かぬ、山中の白日は深夜よりも猶靜かである。

寫生が終つた時は、日もよほど傾いた、元の道を下ること十餘町、山と前景の色の面白い處で、一枚のスケッチをして宿に歸つた、まだ四時前なのに、もうランプが點いてゐた。

七

四日は曇つてゐた。今にも降りさうなので躊躇したが、十時頃出て見た、まづ下の早川の岸へゆく、二三丁の處だけれど、石道の急坂で、途中に水溜りもあるので、下駄ではゆけない、脚袢もつけ草鞋も穿いて武裝しなければならない。坂を下ると人の住まぬ古家がある、たけ高き草が茂つてゐる、家の前には釣橋がある、針金を編むで、眞中に幅廣からぬ板が一枚置かれてある、夏の頃、湯の客が毎晩來ては動かして遊むだとかいふので、足をかけるとグラ〳〵と搖れて、僅か四五間の板を蹈むにもよい心持はしない。

渡り終つて、左の崖の崩れを强いて下ると小さな河原がある、上流から木を流す時、淺瀨に乘り岩に堰かれたおりに、水の中心に押やるため、幾人かの山人が木と共に下つて來る、その人達の歩む道が、砂の上岩の角に印を止めてゐる。

粘板岩といふのであろう、薄く剝がれる黑い大きな岩を越えると、水際で、澄み渡つた水は矢よりも早く流れてゆく、あたりには青い石も赤い石もある、霧のかゝつた上流の山、紅に染まつた兩岸の林、美はしい秋の繪が一枚出來さうである。

私は、刻むで動く水を好まない、此川の上流は野呂川とよばれて、水は油のやうに、山影を浮べたまゝ靜かに〳〵流れてゐるといふ、私はさうゆふ處を書きたいが、此空模樣で二里三里の奥へゆく勇氣もなく、終にこゝの河原に寫生箱を開く事にした

空は漸く暗くなつて、水の色が鉛のやうに光る、霧の霽れた山はおり〳〵頂を見せる、足下に流るゝ水を筆洗に汲むで鼠色の雲を畫き淺綠の岩を畫く、傳彩畫面の半にも至らぬころ、ポツリ〳〵と雨は落ちて來て手にせるパレットの紅を散らし紫を溶かす、傘をかざしてやゝ暫らくは辛抱したが、いつ歇むとしも思へぬ空合に、詮方なく宿へ歸つた。

この夜、大雨の中を、宿のおカミさんは青柳から歸つて來た、このあたりでは、六七才位ひ迄の子供をボコといふ、そのボコを二人連れて、七里の山道を、天長節のお祭見物に青柳へ泊りがけで往つてゐたのだといふ。女中のお吉さんは、雨のふりしきる中を、一里あまり峠上の飴の茶屋迄出迎にゆきボコを負ふて歸つて來たが辛かつたとコボす、お吉さんはサツバリとした氣性の、よく働く娘で、平林のものだといふ、おカミさんのお伴に往つたお春といふ女中も歸つて來た、『お祭りは面白かつたかね』と問ふたら『往きにも歸りにも、また青柳でもボコを背負ひ詰めで、何の面白い處かカラダか碎けさうだ』とこれも少なからず不平を言つてゐた。

八

晩秋は雨の少ない季節だのに、五日になつてもまだ降つてゐる、うす暗い座敷で寫生を突ッいたり、書物を見たりして暮らす。ラスキンの傳記も見た、トルストイのホワット、イズ、アートも讀むだ。

畫前に若い一人の男が來て、兎を一羽買つてくれといふ、副食物の單調に閉口してゐるおりだから、早速三十錢で求める、いろ〳〵近處の山の話をして男は歸つた。

畫には兎を煮て來てくれた、おカミさんは鍋を火鉢にかけながら、兎の價が高いといふてうるさい程口小言をいふ、こちらはそんな事は搆はない、鹽引鱒や筋の多い牛のやまと煮よりは、この方が結構である。

退屈紛れに幾度も湯に入る、浴漕の天井には一坪程の窓があつて、明放しだから、湯の中に雨が降り込む、入口も明け放しで、溪の紅葉の濡色が美しい、湯に全身を侵してゐる時は馬鹿に心持はよいが、出ると寒くつてゾーッとする、も少し熱かつたらと殘念に思はれる。

雨の日や夜分は、便所の通ひもいさゝか厄介である、母屋を離れて細い崖の上を二十間もゆくので。それもあまり綺麗ではない、時としては下駄の無いこともある、在つても濡れてゐて無氣味なこともある、夜は徃々只一つの燈火が消えてゐて、谷へ落ちはしまいかと怖々足を運ばなければならない。

九

六日には漸やく晴れた、結束して奈良田の方へ往つた、白雲の去來烈しく、少しく寒い朝であつた。

早川溪谷の秋は、いまは眞盛りで、到る處の草木の色は美はしい、細い〳〵道を辿つてゆくと、時として杉の林の小暗き處に出る、時として輝眩しいやうな紅葉の明るい處に出る、宿から半道も來た頃、崖崩れのために道は絶えた。

見ると四五十間の廣さに、大石小石のナダレをなしてゐる。幾百丈の上より幾十丈の溪底迄、八十度位ひ、殆ど直立同様の傾きで、恰も瀧のやうに、そして僅かの振動にも、石はカラ〳〵と落ちて、下りゆく程勢は加はり、初めの一つは忽ち十となり百となり千となりて、個々の發する恐ろしき叫びと共に、絶えず溪を埋めやうとしてゐる、五間置き十間置きには、小屋位ひある大きな岩が、今にも轉がらうと、たゞ一突の指先を待つてゐるかのやうな姿勢で溪を覗いて居る、何といふ恐ろしい光景であらう。

下草の磨れてゐる處を、少し斜めに歩を移すと、向ふの崖に通ずる一條の道がたえ〴〵に見られる、崩れた處を、僅かの足がゝりを求めて踏固めたのであらう、湯島から奈良田へゆく人、奈良田から湯島へ來る人は、この道を急いで通るのであらう、若し道の半にして、あの上の大きな石の一つが動いたなら、其儘この早川溪の鬼とならねばならぬ。

君子は危ふきに近よらずといふ、私はこゝから引返さうと思つた、虎穴に入らすんば虎兒を得ずといふ、私は前へ進まうと思つた。そして奈良田にゆけば雪の山が見えやう、雪の山を見たいといふ私の慾望は、終に此危ふき道を、三斗の冷汗を流しながらも通過さしたのである。

幸ひに事無く過ぎて私は顧みた、そして歸途再びこの冒險を敢てしなければならぬと思ふて、慄然として恐れたのである。

ゆくこと四五丁、山角を廻ると、太く大なる山毛欅の木がある、その暗き枝を透かして、向ふに見える明るき山の色の美しさは、この世のものではない、暫く佇立したが、とても短かい時間で寫せさうもないので割愛して進むだ。

澤近く下つてまた上ると、ポツ〳〵藁屋根が見える、中には石を載せた板屋根もある白壁も見える、麥の畑桑の畑も見える早川谷最奥の部落奈良田であらう。

村に入ると、四五人の子供が出て來た、何れも目を大にして私を見上げ見下してゐる『異人だ〳〵』といふのもある『アンだろう』といふのもある、無遠慮な一人はヅカ〳〵と傍へよつて來て『オマイは誰だ』といふ『この邊から白峯は見えるか』と問ふと『**タケー**見に來たのか、**メガネー**持つてるか、オマイの持つてゐるのは何するンか』といふ、『これは腰掛だ』と三脚を示したら、『**コシイ**掛けて、遠眼鏡で岳(タケー)見るのか』と肝心の山の見える見えないには答へもせで、ゾロ〳〵とあとについて來た。

十

二三十戸の村を出ると、右に芦倉の峠がある、峠へ上つて一里あまりもゆかなければ山は見えぬといふ、それよりも此川上を左の溪へ入れば、白河内の山が見える、その方がよからうと人に教へられて、早川に沿いて進む、四五丁にして釣橋があるが、今は損じてゐるので渡れない、河原へ下り、危ふき板橋を過ぎて對岸に移る。

農夫が山奥の燒畑へ通ふための、一筋の道を暫らくゆくと、西岸の山が急に折曲つて、日を背にしたゝめ、深い〳〵紫色に見

見ると四五十間の廣さに、大石小石のナダレをなしてゐる。蔵百丈の上より幾十丈の溪底迄、八十度位ひ、殆ど直立同様の傾きて、恰も瀧のやうに、そして僅かの振動にも、石はカラ〳〵と落ちて、下りゆく程勢は加はり、初めの一つは忽ち十となり百となり千となりて、個々の發する恐ろしき叫びと共に、絶えず溪を埋めやうとしてゐる、五間置き十間置きには、小屋位ひある大きな岩が、今にも轉がらうと、たゞ一突の指先を待つてゐるかのやうな姿勢で溪を覗いて居る、何といふ恐ろしい光景であらう。

下草の磨れてゐる處を、少し斜めに歩を移すと、向ふの崖に通ずる一條の道がたえ〴〵に見られる、崩れた處を、僅かの足がゝりを求めて踏固めたのであらう、湯島から奈良田へゆく人、奈良田から湯島へ來る人は、この道を急いで通るのであらう、若し道の半にして、あの上の大きな石の一つが動いたなら、其儘この早川溪の鬼とならねばならぬ。

君子は危ふきに近よらずといふ、私はこゝから引返さうと思つた、虎穴に入らずんば虎兒を得ずといふ、私は前へ進まうと思つた。そして奈良田にゆけば雪の山が見えやう、雪の山を見たいといふ私の慾望は、終に此危ふき道を、三斗の冷汗を流しながらも通過さしたのである。

幸ひに事無く過ぎて私は顧みた、そして歸途再びこの冒險を敢てしなければならぬと思ふて、慄然として恐れたのである。

ゆくこと四五丁、山角を廻ると、太く大なる山毛欅の木がある、その幹を透かして、向ふに見える明るき山の色の美しさは、この世のものではない、暫く佇立したが、とても短かい時間で寫せさうもないので斷愛して進んだ。

澤近く下つてまた上ると、ポツ〳〵葦屋根が見える、中には石を載せた板屋根もある白壁も見える、麥の畑桑の畑も見える早川谷最奥の部落奈良田であらう。

村に入ると、四五人の子供が出て來た、何れも目を大にして私を見上げ見下してゐる『異人だ〳〵』といふのもある『アンだろう』といふのもある、無遠慮な一人はヅカ〳〵と傍へよつて來て『オマイは誰だ』といふ『この邊から白峯は見えるか』と問ふと『タケー見に來たのか、メガネー持つてるか、オマイの持つてゐるのは何するンか』といふ、『これは腰掛だ』と三脚を示したら『コシイ掛けて、遠眼鏡で岳（タケー）見るのか』と肝心の山の見える見えないには答へもせで、ゾロ〳〵とあとについて來た。

十

二三十戸の村を出ると、右に苔倉の峠がある、峠へ上つて一里あまりもゆかなければ山は見えぬといふ、それよりも此川上を左の溪へ入れば、白河内の山が見える、その方がよからうと人に教へられて、早川に沿いて進む、四五丁にして釣橋があるが、今は損じてゐるので渡れない、河原へ下り、危ふき板橋を過ぎて對岸に移る。

農夫が山奥の燒畑へ通ふための、一筋の道を暫らくゆくと、西岸の山が急に折曲つて、日を背にしたゝめ、深い〳〵紫色に見

T. Thomson 09.

える、其前を徃手にあたつて、數株の落葉松（カラマツ）の若木が、眞に燃へ立つやうな、強い明るい**オレンヂ**色をして蓊々と立つてゐる、ハツと思つて魅せられたやうに無意識に、私の手は寫生箱にかゝつた。

狹い道の一方は崖一方は山、三脚を据える處がない、人通りもあるまいと、道の眞中に腰を下した。

落葉松の新綠の美しいことは、曾て輕井澤のほとりで見て知つてゐる、秋の色としては、富士の裾野に、又は今度の旅でも、鰍澤の近くで、其淋しげな黃葉を床しいと思つた、しかし私が、今眼前に見るやうな、こんな鮮やかな色があらうとは思ひ及ばなかつた、植物として私の最も好む山百合、豌豆の花、白樺、石楠花のほかに、私は落葉松といふ一つの喬木を、この時より加へることにした。

一時間程筆を走らせて、更に上流へと歩を進めた、五六丁にして道は左の澤に入る、こゝで早川の本流と別れて、この澤に沿ふてなほ深く入り込む、崖が盡きて、危ふき梯子を懸けた處もある、溪の上にたゞ一本の木の橋に渡した處もある、かゝる山懷ろにも燒畑は在つて、憐れげな豆や粟が作られてゐる、其又奥には下駄を造る小屋もある、山人の生活は勞多きものである』

往けども〳〵も白河内の山は見えない、あの高き處へ上ればと、汗ぬぐひつゝ辿りつけば、更に木立深き前山が、押冠さるやうに近々と横はつてゐる、道も漸く覺束なく、終には草ばかりになつて了ふ、歸りの時間も氣遣はれる、足も痛み出した、山の見えぬのは殘念だが終に引返すことにした。

二十丁程も戻つて初めの澤近く來た時、不圖前面を見ると、例の落葉松の深林が、背後（うしろ）から午後の日をうけてパツと輝いてゐる、根元の方にも日の光りは漏れて、幹は黑々と、葉は淡き**アントシーナ**を塗つたやうに、琥珀色に透明して、極めて美はしい。畫きたい〳〵と、一度は三脚の紐を解いたが、歸り道の崖崩れを思ふと、何となく急き立てられるやうで、終に筆を執らずに仕舞つた。

危ふい崖道も、來た時よりはラクに過ぎて、湯川近くに二日前の寫生を續けた、二日前は曇つた日で、今日は晴れてゐる、調子は異ふが、日が傾いて谷は暗く、水色も同じに見えるので、少し無理だが仕上げることにした。

この日はかなり長い道を歩いた、膝の關節が痛い。

十一

下湯島の獵師に、大村晃平、中村宗平といふのがある、烏水氏等の案内をして、幾度となく白峯の奥へ徃つた人達だ。晃平は中風病で寢てゐる、宗平は山仕事が忙しい、宗平の弟に宗忠といふのは、この夏山岳會の人達の赤石縱走を試みた時、人夫として同行したといふ、その男は職業は大工で、いま新湯の仕事に來てゐる、いろ〳〵山の話をきくと、下湯島の對岸をとること一里半程で、六萬平といふ處からは、井川の山々（白峯連嶺）、またその先の赤石の方迄もよく見えるといふ、朝早く出れば夕方には歸れやうといふので、七日の朝、私は宗平を連れてそこ

にゆくことにした。

晴れた日であつた、寫生箱畫板など、いさゝかな荷物を宗平の背に托して、早川に沿ふて下流へと歩を運むだ、道もせに咲き殘つてゐる紅の石竹花、純白の野菊、うす紫の松蟲草などとりぐ〳〵に美はしい、上湯島の少し手前から河原に下りる、山崩れの跡が幾箇所かあつて、道は平ではない、早川の水が堰かれて淵を成す處、激して飛瀑を成す處、孰れもよき畫題である、長い釣橋を右に見て、それを渡らずに七八丁もゆくと、黒い〳〵杉の森が見える農家の屋根、桑の畑、水車、小流、そこが下湯島の村で、石垣に沿へる小道を通つて、私共は宗忠の家に立よつた。

下湯島の村は、數年前全戸殆と火の禍をうけたため、家は皆新しい、上湯島には萱葺の屋根多きに、こゝは板屋に石を載せて置く。家は小さいが木は多いから、さすがに柱は太い。村といふても平地は殆と無いが、やゝ緩やかな傾斜地に麥が作つてある、畑の中には大きな石がゴロ〳〵してゐる、家の廻りには鍬の把、天秤棒、下駄など、山で荒削りにされたまゝで軒下に積まれてある。

宗忠は身仕度をして出て來た、何か獲物もあらうといふので一挺の銃も持つてゐる。

早川を渡ると、直く急傾斜の小さな坂で、その上は畑が作られて、麥の緑は淺い、石道をゆき、草の中をゆき、いよ〳〵雜木茂れる山にかゝる、道は落葉に埋められ、今朝おりた霜の白きもあり、融けて濡れたのもある、とかく辷り勝ちで足の運びは鈍い。

山の傾斜がいかにも急であるために、道は右に左に細かく縫ふてつけられてある、小さな澤を渡つて十四五丁ゆくと、樹は漸く太く、針葉樹も交つてゐる、人の踏むこと少なきためと、寒さの早いにめに、落葉は道を埋めて、二三尺も積もつてゐる、カサ〳〵と徒らに音のみ高くて、泳ぐやうな足つきでは一歩を運ぶにも困難である、剩つさへ、二日以來の足の痛みは、今朝宿を出た時から常ではないので、此急峻な山道では一方ならぬ苦痛を覺えた。

途中の用意にもと、宿から持つて來た**サイダー**を、一口二口飲みながら上る、**サイダー**は甘味があり粘りがあつて極めて不味だ、かゝる時は冷たき清水に越すものはない、自然は山人に**サイダー**にもまさる清水を、惜氣もなく與へてゐるのである。

樹木のまばらな處へ來た。澤を隔てゝ遙かの木立に、カラ〳〵と石の崩れ落ちる音がする、宗忠は木の切株に上つて見つめてゐる、羚羊（かもしか）か猿だらうといふ。カラ〳〵といふ音は四邊の寂寥を破つて高くきこえる、羚羊の姿が見えるといふ、仔ら連れてゐるといふ、併しこゝからはあまりに遠くて、彈丸は屆くまいと殘念さうである。

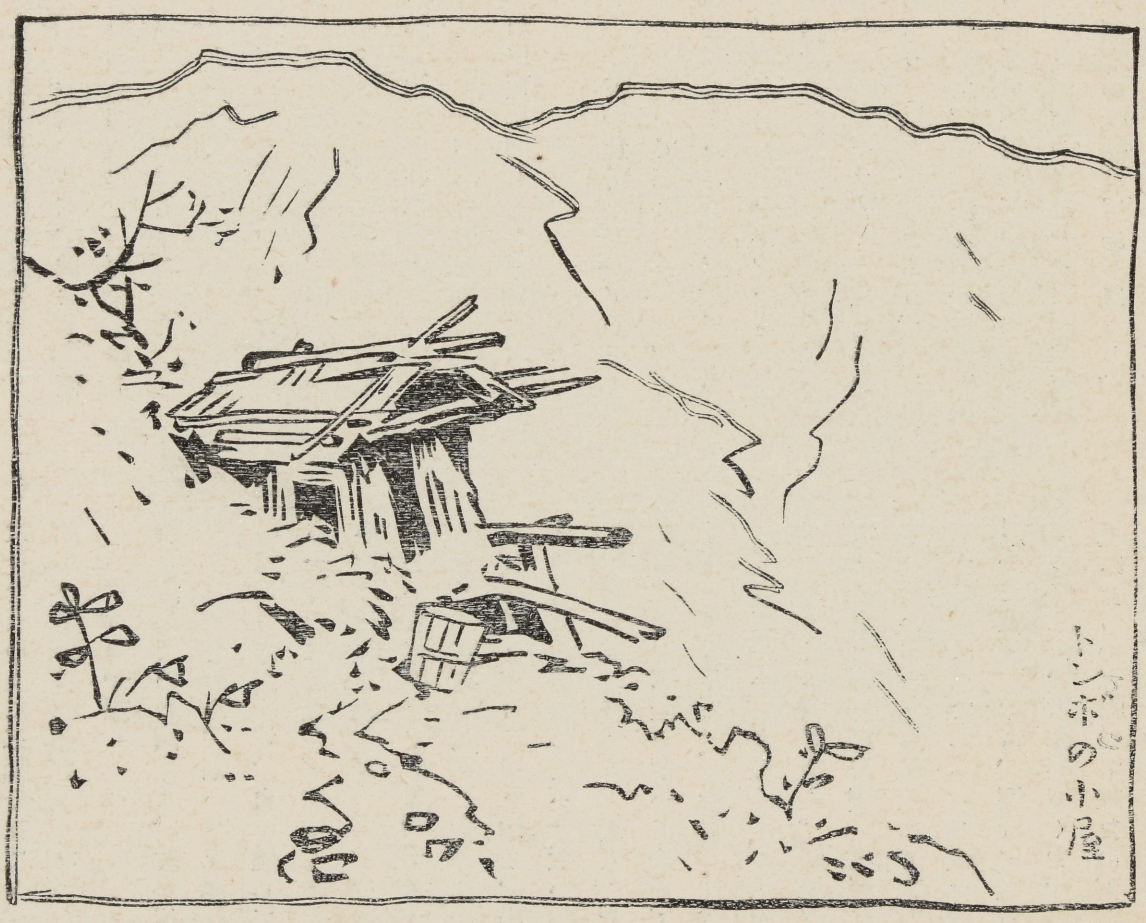
澤川の根といふ處は少しく平になつてゐる、數年前會社で木を伐り出した時に、六尺幅程の林道を作つた其跡だといふ、道は今甚しく崩れて、人も通れぬが、此邊にはそれらしい樣子は見

える。

西山連峰の上を、富士が高く現はれてゐる。北には地藏藥師等の山々が、重なり合ふて、前岳の大崩れは、殘雪のやうに白く輝やく、やゝ西へ寄つて白河内の山が鮮やかに姿を出してゐる、こゝで晝食をすませ、スケッチを試み、暫時休息した。

目的地の六萬平はなほ半里の西で、是から往つたのではたゞ一寸と見て來るだけで、繪など描いてゐては、溫泉へ歸るのは夜るになると宗忠は心配氣にいふ、足下の悪い道を夜になつて歸るのは好ましくない、此邊に小屋があらば今夜は泊つて、明朝早く六萬平へ往かうと決心した、幸ひ半道程下に宗平の家の小屋があるといふので、疲脚を鞭うつて下山した。

落葉の道は、上り(のぼ)よりも下りは一層歩み悪い、ともすれば辷りさうで、胸を轟かしたことも幾度かある、、來た道を右に折れてトンボの小屋へ着いたのは三時頃であつたらう。



十二

トンボの小屋は、下湯島村から一里の、切立つたやうな山の半腹にあるので、根深き岩の裾を切込み、僅かに半坪程食ひ込ましてあとの半坪は虚空に突出してある、極めて小さな、そして極めて危險なものだ、僅か一坪の平地すらない此邊の地勢から考へても、其勾配の急なことが知れやう。

こゝは村から一番奥の燒畑で、あまりに離れてゐるので、畑仕事の最中の俄雨に逃げ込むため、また日の短かい時分、泊りがけに農事をするためにこしらへた粗末な建物に過ぎない。

燒畑といふのは、秋に雜木林を伐り倒し、春に火をかけて燒く、

そして燃殘りの太い幹で、一間置又は二間置位ひに柵を造つて土留として、七八十度の傾斜地を、五十度なり六十度なりに僅か宛平にして、蕎麥、粟、稗、豆の類を作るので、麥などはトテも出來ぬ、若しこの燒木の柵を離れたなら、足溜りがなくて、直立して居ることは出來ない、山なき國の人は、畑は平なものと思つてゐやう、私も曾てはさう思つた一人であつた、この邊の人々は、畠は坂になつてゐるものと思つてゐやう、田も無い池も無い、早川や湯川や、瀧のやうに流るゝ勢を見ては、水も恐らく平のものとは考へてゐないかも知れない。

燒畑は、其燒灰が肥料となつて、三四年は作物も出來る、夫から後は其儘捨て置いて、十七八年目に更に同しことを繰返すのだといふ。

宗忠は、暮れぬ間に湯島へ往つて、今夜の食料を持つて來るといふ、湯島へゆくなら何か駄菓子でも買つて來よといへば、そんなものは村には無いといふ、砂糖でもよいといへば、正月か祭りの時でゝもなければ誰れの家でも持たぬといふ、なるたけ早く歸りますと言捨てゝ、猿の如く麓を目がけて走り去つた。

秋の西山一帶は、午後三時の日光をうけてギラ〳〵と眩しいやうに輝いてゐる、常磐木の綠もあらう、黑き岩もあらう黃なる粟畑もあらうが、それ等は烈しき夕陽に、たゞ赤々と一色の感じに見える、その明るい中を、トンボの小屋は丁度山蔭に在るので、クッキリと暗く、恰も切り拔いて貼つけたやうに、其面白き輪廓を畫いてゐる。私は兎の係蹄の仕掛けてあるほとり、大きな石の上に三脚を立てゝ、片足は柵に、片足は折敷いて、危ふき姿勢に釣合をとりながら、こゝの寫生を試みた。

十三

輝き渡つてゐた西山も、次第に影が殖えて、肌寒くなつて來たので寫生をやめ、細い道を傳はつて小屋に來た、小屋には宗忠の父なる人が居て、火を燃して私を待つてゐた、遙かの谷底から一樽の水も汲むで來てくれた。

小屋は屋根を板で葺いて、その上に木を横へてある、周圍は薄や粟からで圍つてある、中は入口近くに三尺四方程の圍爐裡があつて、古莚を敷いた處は曲の手の一疊半程に過ぎない、奥の方には岩を穿つて棚を作り、鍋やら茶碗やら、小さな手ランプなどの道具が少しばかり置かれてある、部屋の隅には脂に汚れた蒲團が置いてある、老人はやゝ醜からぬ臭座を一枚敷いてくれた、私は草鞋を解いて初めて快よく足を伸した。

日のくれ〳〵に、一袋の米と味噌を背負つて宗忠は歸つて來た。こゝは狹いから老人は下の小屋へ泊るといふて、何やら入つた袋をさげて下りてゆく。宗忠は鍋の中で米を磨ぐ、火にかける、飯が出來たらそれを深い水桶にあけて、其跡へは玉味噌をとき、皮もむかぬ馬齒薯を入れて味噌汁をつくる、私の好奇心は、宗忠の爲事に少なからぬ興味を覺えた。

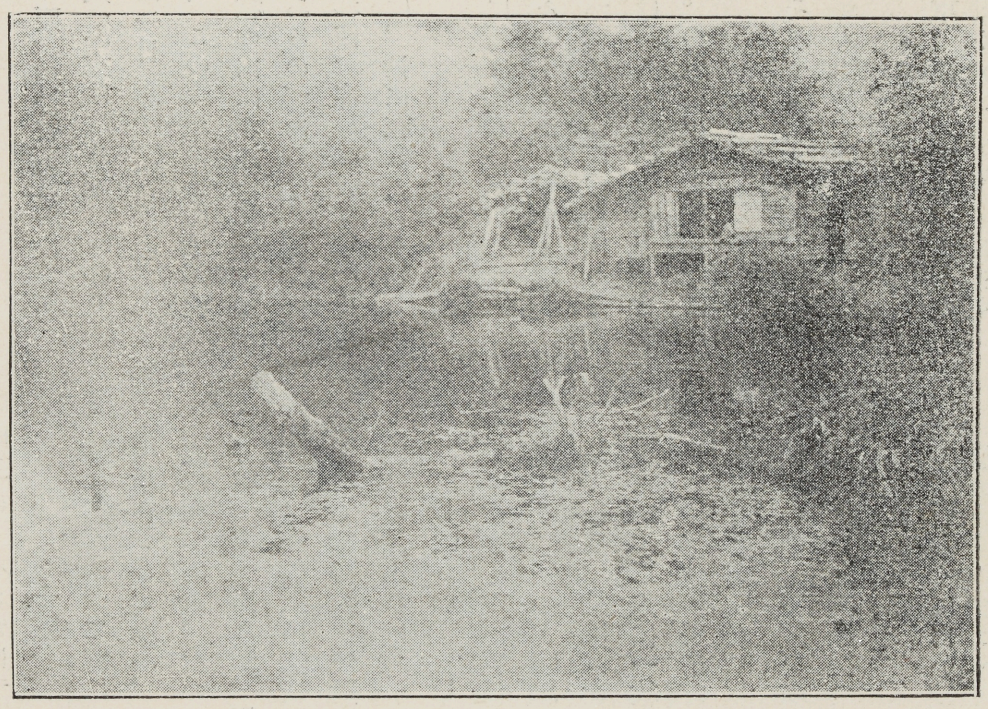
戸外に足音がする、明けて見ると、闇の中を宗忠の兄の宗平が歸つて來た、六萬平近く山仕事をしてゐたが、夕方に出た雲が氣になるので歸つて來たのだといふ、雲とは何、折角山中に泊

つて雨では困るが、これも詮方がない。三人で食事にかゝる、手ランプには少し油があつたので、それをともす。寫生箱は膳の代りとなり、筆は箸になる、二つの緣の壞けた茶碗、一つには飯が盛られ、一つには汁がつがれた、宗平兄弟はメンパとよぶ辨當箱を出して、汁を上から掛けては箸を運ぶ。

土もついてゐるらしい薯の汁も、空腹には珍味である。山盛三杯の飯を平げて、湯も飲まずに食事を終つた。彼等の手にせるメンパといふのは、美濃方面で出來る漆で塗つた小判形の辨當で、二合五勺入りと三合入りとある。山へ出る時は、二ツ若くは三ツを持つてゆくといふ。彼等の常食は、一日七八合、仕事に出た時は一升が普通だときいては、加何に粟や稗の飯でも、よく食べられたものだと感心する。

十四

山小屋の秋の一夜。私はツルゲネフの獵人日記を思ひ出しかべつゝ、再び遭うことの難かるべきこの詩的の一夜を、樂しく過さむ手段を考へた。



池の茶屋

窓近くに鹿が鳴いたら嬉しからう、係蹄で捕れた兎の肉を、串にさして榾火で燒きながら、物語をしたら樂しからうと思つた。圍爐裡の火は快よく燃える、銘々長く双脚を伸して、山の話村の話、さては都の話に時の移るをも知らない。

宗平は眞鍮の煙管に煙草つめつゝ語る、さして興味ある物語でもないが、恁うした時恁うした場處では、それも趣ふかくきかれたのであつた。

獵の話から始まる。

昔しは、羚羊も、鹿も、猪も、熊も、猿も、狼も、里近く迄來た、其數も多かつたが、近頃は殆と姿も見せぬといふ、猿は山畠に豆をとりに來るが、其數も少なくなつたといふ。數年前、信濃の獵師が、此山で大熊を捕へたが、格鬪のとき頰の肉を喰ひ取られた、熊は百金に代へられたもの

の損であつたといふ。

湯島村の經濟に話は移る。

貧しい村で、農産物は少しばかりの麥、粟、稗、豆のたぐひと、僅かの野菜に過ぎぬが、それでも村で食ふ丈けはある。何れも山畠で、男の兒は十二三になれば、夏は一日一度は山畠に出る。砂糖も無く、菓子もなく、果物も無い、この土地の子供は氣の毒なものだ。夏の野に木苺をもとめ、秋の山に木通（アケビ）や葡萄の蔓をたつねて、淡い〳〵甘味に滿足してゐるのである。

家々の生活は簡單なもので、醬油なければ、麥の味噌はすべてのもの〵調味を掌つてゐる。鰹節などは、世に在ることも知るまい、梅干すら無い。

早川は在つても魚は少ない、このやうに村は貧しいが、また天惠も無いではない。湯島の溫泉から年々いくらかの稅金も取れる、早川から冬は砂金が採れる、交通が不便のお蔭に物入りもなく、貧しいながらも困つてゐるものは一人も無いといふ。この兄弟も、銘々懷中時計を持つてゐる。宗忠の家にも大きなボン〳〵時計があつた。

このやうに、碌なものは食はないが、それでも皆丈夫で、醫者は一人も居ないが病人も無い。奈良田でも湯島でも、徵兵檢査に不合格は殆ど無いと誇つてゐる。

牛を知らぬ、馬を知らぬ、人力車、馬車、瀧車、電車、そんなものは見たことがない、車といふのは水車のことで、小舟さへ無いから、瀧船も軍艦も畫て想像するばかり、勿論白峯の頂上へでもゆかなければ海も見えない。東京を西に距ること僅かに三十里、今もなほ昔しの儘の里はあるのだ。

十五

話に實が入つて夜は十一時になつた。山人はソコラで無暗に小用されるとを嫌ふ、便所はときくと、この小屋の溪に向つた方に板がある、その上からといふ、蠟マツチをてらして辛ふじて板の上へ出たが、絕壁にも比すべき處に、突出された二本の丸太、その上に無造作に置かれた一枚の薄板、尾瀨沼のそれにも增した奇拔な便所に、私は二の足を踏まざるを得なかつた。『空はと見上れば星一つ無い、雲の往來も分らぬ、眞の闇でそよとの風も吹かぬ夜を早川の溪音が幽かに、遠く淙々と耳に入る』

薪は太きものが夥多加へられた、狹き處を押合ふやうに銘々横になる。宗平と宗忠は、私に遠慮して、入口近く一團となつて寢てゐる、枕はメンパであらう。宗忠の持つてきた怪しげな縞毛布か、二人に一枚かけられてある。私は、彼等が手にとつて見て、ゾッキ毛糸だと驚いた厚羅紗の外套を着たまゝ、有合せの布團を恐る〳〵かけた、枕は寫生箱の上に、新しい草鞋、頭が痛いので手袋を載せた、箱が辷つて工合がわるい。

何れも足は圍爐裡の中へ、縮めながらも踏込むだまゝだ。榾火が消えかゝると、誰れか起きては薪を加へる、バチ〳〵と音して、暫らくは白い煙りがたつ、パッと燃え上る、驚いて足を引込めるが、またいつか灰の中に入つて、足袋の先を焦がすのであつた。

小屋には床はない、土の上に莚を敷いたばかりだが、その土は溪の方へ低くなつてゐる、圍爐裡に足を入れてゐては、勢ひ頭は低い方に向く、頭の足より低いのは、一體心地のよいものではない、身體は崖の方にズリ下る、ズツて〳〵其儘早川溪へ墮ち込むやうな氣がして、夢はいく度となく破れる。何やら虫が居て、襟から手元から、そこらあたりがむづ痒い。右を下にした、左を下にした、仰向いても見た、時々は吾知らず足を伸ばして、薪木を蹴り火花を散し、驚いて飛起きたこともあつた。

宗平兄弟も、鼾の聲はするがよくは眠らぬらしい、絶えずおきては火を消すまいとする、お蔭で少しも寒さを覺えなかつた』

サラ〳〵と板屋をうつ雨の音がする、烈しくは降らぬが急に歇みさうにもない、井川の山々は、何故私に逢ふのを嫌ふのだらうと情なくもなる。

十六

無造作に押よせた入口の草の戸、その隙間から薄明りがさして、いつか夜は明けたらしい。起きて屋外へ出たが、一面の霧で何も見えない、西山東山、そんな遠くは言はずもがな、足許の水桶さへも定かではない、恐ろしい深い霧だ、天地はたゞ明るい鼠色に塗られて仕舞つた。

顔を洗ふことは出來ない、僅かに茶碗に一杯の水で口を漱いで小屋に入る、宗忠は飯を炊き始める、水桶に移すと、今度は宗平が飯を炊く、見ると湯の沸いた中へ、一升ばかりの粟を入れる、村では少しの麥を加へるさうだが、山上では粟ばかりだといふ、どんな味かと聞たら、溫いうちはよいが、冷えたらとても東京の人には食べられまいといふ。

今朝は汁も無い、辛い味噌漬二切で食事を濟ます。

暫らく焚火を圍みながら、天氣の模樣を見る。

霧は晴れさうにもしない、澤のほとり、林のあたりで、何やら冴えた聲で鳥が啼く、うつとりとよい心持になる、歌舞伎座も八百膳も用はない、この儘一生こゝに居ても悪くは無いと思ふ。

が、さうもならない、この霧は晝過にでもならねば晴れまいといふ、殘念だが六萬平を思ひ捨てゝ、湯の宿へ歸ることにした』

霧の中を下へ〳〵と急ぐ、急に明るくなつて、遠くの山が一角を現はすかと思ふと、忽ち暗くなつて、直ぐ前の林をかくす、歩一歩、早川溪の水聲が高くなつて、吾等はいつか宗平の家の前に立つた。

俄に雨が降り出したので、洋傘を借りて、露繁き草道を、溫泉へ歸つたのは十時頃であつた。

昨夜歸らないので、宿では迎ひを出さうとしたさうだ。併し宗忠もついてゐるから、多分湯島へ泊つたことゝ、終に見合せたといつてゐた。

生溫くとも湯に入つた心持はわるくはない。

湯島は皆新平民だと人から聞いた、夕飯にお春さんが給仕に來たとき、ほんとかねとたづねたら、何の事ですと、迷惑さうな曖昧な返辭であつた、私はお春さんの湯島生れといふことを知らなかつたので、あとで氣の毒な思ひをした。

十七

九日には曇つてゐたが、降りさうにもないので、前日見て置た湯島河原の小流を寫さうと思つて、九時ごろから出けた。上湯島に渡る釣橋の手前で、河原を少し跡へ戻ると杉の森があつて、其下に細い流れが見える、流れに掩ひ冠さつてゐる秋草の色が美はしい、こゝで縦畫を描きはじめて四五時間を送つた』

十日には出發の豫定であつたが、朝起きて見れば、すさまじき大雨で終に見合はせた、昨夜は滿天の星が輝いてゐたのに、秋の空は頼みかたいものだと思ふ。

清かりし湯川の水も濁り、早川は褐色に變つて、水嵩も常に幾倍して凄い勢であつた。

湯島溫泉の長所は、氣候の溫和なため、秋の紅葉が長く見られること、宿の氣の置けぬことなどて、短所は、一寸出るにも武裝をせねばならぬ不便、郵便のおそき事、物價の安からぬことなどてある。

夜に入つて大風吹きすさみ、梢を鳴らし枝を振ふ、紅葉苦葉、恐らくおとかたもなく早川の流に亂れて、遠く〳〵南の方に去り、一夜にして此溪を冬に化せしめしことならんと思ひつゝ夢に入る。

十八

十一日は、霧の間に所々鮮やかなコバルトの空も見えた。宿を出たのは八時半、峠の上迄といふので、宿の若い人に荷物をたのむ。來路を避けて七曲峠を、池の茶屋へ出で、鰍澤に向ふのてある。

天長節に上つた峠、それと同じ道で、通例曲折の烈しき處を、よく九十九折などゝ形容するが、こゝは實に二百餘を數へた、生憎の霧は南の空を掩ふて、雪の峯は少しも見えない。

一里程で栂の林となる、ジメ〳〵と土は濡れて心持かわるい、折々白い霧は麓から卷き上げて來て、幹と幹との間を數丁の隔たりに見せる。

峠を越して少し下り道の處で若者に別れ、これからは獨りで可なり重い道具を擔いてゆく、何處も霧て、數間先もよく見えぬ、心細いこと夥しい。

雨後奇寒のために出來た現象であらう、道端の木々の枝は、珠と聯なる雨水が、皆凍つて、水晶で飾つたやうに、極めて美はしい。木の葉には、霧は露となり、露は凍つて、氷掛けの菓子のやうになつて、枝にしがみついてゐる。

時ならぬ人の氣配に驚いてか、山鳥が近くの草叢から飛出す。ハタ〳〵と彼方に音するのは、鳩であらう。山毛欅の大木に絡む藤蔓、それをあなたこなたと跳び走つてゐるのは栗鼠である』

熊笹を分けて一筋道をゆくと、往手に新しい家が見える、飴の茶屋といふのはこれであらう。戸は閉されて誰れも人は居らぬ。

青柳へ下つて歸らぬので、冬は大かた里に居るといふ。

茶屋の前から道は三筋に分れる、池の茶屋へゆくもの、デッチヨーの茶屋へ向ふもの、他の一つは奈良田へゆくのである、私は左を取つて池の茶屋へ向つた。

十七

九日には曇つてゐたが、降りさうにもないので、前日見て置た湯島河原の小流を寫さうと思つて、九時ごろから出けた。上湯島に渡る釣橋の手前で、河原を少し跡へ戻ると杉の森があつて、其下に細い流れが見える、流れに掩ひ冠さつてゐる秋草の色が美はしい、こゝで縱畫を描きはじめて四五時間か送つた』

十日には出發の豫定であつたが、朝起きて見れば、すさまじき大雨で終に見合はせた、昨夜は滿天の星が輝いてゐたのに、秋の空は頼みかたいものだと思ふ。

清かりし湯川の水も濁り、早川は褐色に變つて、水嵩も常に幾倍して凄い勢であつた。

湯島溫泉の長所は、氣候の溫和なため、秋の紅葉が長く見られること、宿の氣の置けぬことなどで、短所は、一寸出るにも武裝をせねばならぬ不便、郵便のおそき事、物價の安からぬことなどである。

夜に入つて大風吹きすさみ、梢を鳴らし枝を振ふ、紅葉落葉、恐らくあとかたもなく早川の流に亂れて、遠く〳〵南の方に去り、一夜にして此溪を冬に化せしめしことならんと思ひつゝ夢に入る。

十八

十一日は、霧の間に所々鮮やかなコバルトの空も見えた。宿を出たのは八時半、峠の上迄といふので、宿の若い人に荷物をたのむ。來路を避けて七曲峠を、池の茶屋へ出で、鰍澤に向ふのである。

天長節に上つた峠、それと同じ道で、通例曲折の烈しき處を、よく九十九折などゝ形容するが、こゝは實に二百餘を數へた、生憎の霧は南の空を掩ふて、雪の峯は少しも見えない。

一里程で栂の林となる、シメ〳〵と土は濡れて心持かわるい、折々白い霧は麓から卷き上げて來て、幹と幹との間を數丁の隔たりに見せる。

峠を越して少し下り道の處で若者に別れ、これからは獨りで可なり重い道具を擔いでゆく、何處も霧て、數間先もよく見えぬ、心細いこと夥しい。

雨後奇寒のために出來た現象であらう、道端の木々の枝は、珠と聯なる雨水が、皆凍つて、水晶で飾つたやうに、極めて美はしい。木の葉には、霧は露となり、露は凍つて、氷掛けの菓子のやうになつて、枝にしがみついてゐる。

時ならぬ人の氣配に驚いてか、山鳥が近くの草叢から飛出す。

ハタ〳〵と彼方に音するのは、鳩であらう。山毛欅の大木に絡む藤蔓、それをあなたこなたと跳び走つてゐるのは栗鼠である』

熊笹を分けて一筋道をゆくと、徃手に新しい家が見える、飴の茶屋といふのはこれであらう。戸は閉されて誰れも人は居らぬ。

青柳へ下つて歸らぬので、冬は大かた里に居るといふ。

茶屋の前から道は三筋に分れる、池の茶屋へゆくもの、デッチヨーの茶屋へ向ふもの、他の一つは奈良田へゆくのである、私は左を取つて池の茶屋へ向つた。

空模様は段々よくなり、折々はパッと日が照らす、山腹の岨道を何處までもゆく、少し宛の下りて足の運びは早い。

湯島から三里も來たころ、枝振よき栂の枯木を見つけて寫生する。直く近くの笹の中では、鷭鶯が一羽二羽、こゝに繪筆走らす旅人ありとも知らで、さゝ啼きの聲が忙しない。

池の茶屋に着いたのは一時半であつた。

十九

山蔭の窪地に水が溜つてゐる、不規則な楕圓形の、廣さは一反歩もあらう、雜木林に圍まれて水の色は青い、湯島のお吉さんは悽い池ですと言つたが、枯木林の中に在つたのでは、一向悽くも怖ろしくも無い。茶屋に荷物を預けて、ジク〳〵した水際の枯草を踏み、對岸に廻つて寫生箱を開いた。

破れかゝつた家は、水に臨むで其暗い影を映してゐる、水の中には浮草の葉が漂ふてゐる、日は山蔭にかくれて、池の面を渉る風は冷たい、半ば水に浸されてゐる足の爪先は、針を刺すやうに、寒さが全身に傳はる、思はずも身慄するとき、早や池の水は岸近くから凍り始めて、家の影はいつか消え失せ、一面磨砂子のやうになる、同時にパレットの上の水が凍つて繪具が溶けない、筆の先が固くなる、詮方なしに寫生をやめた。

池の茶屋といふのは、この冷たい水の滸りに建てられるたゞ一軒の破ら家である。入口の腰障子を開けて入ると、直ぐ大きな圍爐裡がある、圍爐裡の中には電信柱程もある太い薪木が燻つてゐる、上に吊された漆黒な鐵瓶には、水の一斗も入るであらう、突當りは棚で、茶碗やら德利やら亂雜に並むでゐる、左の方は眞暗で分らないが、恐らく家族の寢間であらう、こゝでも飴を賣るかして、小さな曲物が片隅に積むである。

おカミさんは盥に湯をあけてくれた、凍りきつた足にはまたなく快よい。通されたのは池に面した座敷で、形ばかりの床の間もあれば、座敷とも言へやうが、たゞ五六枚の疊が置いてあるといふだけで、障子も無ければ襖も無い、天井も無い、のみならず、幾十羽の鷄の塒は、この部屋の一部を占領して高く吊られてある。

五六枚疊むで重ねられた蒲團の上には、角材を其儘切つて、短册形の汚れた小蒲團を括しつけた、枕が置かれてある。其後ろの柱には、此家不相應な、大きな新しい時計が、午後三時を指してゐる。床の間には、恐れ多くも　兩陛下の御肖像を並べて、其下に三十七年宣戰の勅が刷られてある。そして床の落し掛けから、ホヤの缺けた、すゝけたランプが憐れつぽく下つてゐる。』

主人夫婦に子供二人、その姉娘は六ツばかりにならう、このボコは其名をよしえとよばれて、一方ならぬお茶ツピーだ。小さな火鉢に、榾火の焚き落しを運んで來る、『官員サンに何か出さねーとわるいぞよ――、小寒いに――、火でもくれないとわるいぞよ』といふ、洋服を着けた人は誰れでも官員サンである。

二十

よしえのいふ通り、この小寒いのに、少しばかりの消炭ではやりきれない。灰が起つので帽子を冠つたまゝ圍爐裡の傍へゆ

く。退屈紛れに、このお茶ピーでもと思つて、**スケッチブック**を出す、おカミさんはこれを見て『**よしえ**早く隠れろー』と、けたゝましい聲で叫ぶ、『そんな見ぐさい風して寫されては叶はんぞ、池の茶屋の**ボコ**はこんなだと、東京へ持つて歸つて話されたら困るに、早や着物を着かへさすに、コッチへ來う』といふ、『あの黄八丈の着物かや』と**よしえ**は大喜びだ、大變なことになつて仕舞つた、明日だ〳〵と、私は大急ぎに**スケッチブック**を袂に藏つた。

亭主は小さな**ボコ**を抱いて、圍爐裡で飯を炊ぐ、おカミさんは汁を造るべく里芋を洗ふ、そして皮つきの儘鍋の中に投げ込む、鹽引鱒が燒かれたが、私はそんなものに用は無い、宿の人達と共に、焚火の傍で夕食を濟ました。

亭主は突然口を切つて、『平林から先年東京へ出た人があるが、東京も廣いさうだから御存知あるまい』といふ『有名な人か』と聞いたら、『村で失敗して、夜逃のやうにして往つたのだ』といふ、人口二百萬といふ數は、この人達には見當がつくまい、東京を鰍澤の少し大きい位ひに思つてゐるのかも知れぬ。

おカミさんは、『俺れは何の願ひも無い、たつた一度でいゝに、東京を見て死にたい』といふ、お曉舌の**ボコ**はすぐ口を出す、『俺ら東京へゆくぞよ東京へ往つて、年イ拾ふてデカくなるンぞ、掩ら年イ拾ふてデカくなると、**カッカ**は**バンバ**になるぞ』と言ふ。

話しはそれからそれへと移る、平林の村は殆と日蓮宗であること、自分達は冬になると平林へ歸ること、池の傍だけに寒さの強いといふこと、この池から氷が採れる、厚く張る時は二尺を起える、一尺の氷の下に置た新聞も讀める程透明であるといふこと、是から先は、毎日此家に日はあたらぬ、雪も可なり深いといふこと、先年東京から祭文語りが來て、佐倉宗吾の話をした時、降積む雪は二尺あまりといふたので、氣早の若者は、馬鹿を吐け、山の中じやァあるまいしと、大に怒つて撲りつけたといふ、『東京でも所によると二尺位積つた年もあつた』と言ふたら、亭主は『へゝー、それじやァ祭文語りは可愛想でした』と大笑ひをした。

おカミさんは、商賣物の水飴を箸に卷いては連りに勸める、**よしえボコ**は絶えず口を動かしてゐたが、終に床の上から入口の土間に小用して、サッサと寢床へ入つて仕舞つた。

『寒いおめはさせません』と、おカミさんは、小ざつぱりした布團を出して、幾枚も重ね、幾枚もかけてくれた。寢衣はないから、外套を脫いたばかり、着のみ着の儘で横になる、雨戸も無い窓の障子の、透間から吹込む風は可なり冷たい。

二十一

早川の山小屋よりも寢心が悪い。柱時計の音は、十を數へ十一を數へ、十二を數へた。山中の夜は靜かで、針を刻む**セコンド**は殊更に冴えて耳元に響く。やがて一時が鳴る、直く上の塒では一番鷄が啼く、ウト〳〵しながらも、二時三時と一つも聞漏さずに一夜を過した。

窓が白む。**ランプ**が消される。圍爐裡からは白い煙りが立つ。一同が起きた。昨夜と同じく、榾火にあたりながら朝食をすます、**よしえ**は母親を急き立てゝ、黄八丈を出せといふ、昨日のことを忘れないのだ。母親も忙しい中を、剃刀出して**よしえ**の顔を剃る、髪を結ぶ、紅い**リボン**をかける、木綿の黄八丈はいつの間にか着せられて、友禪**モスリン**の帶が結ばれた、座蒲團を敷いてチョコンと座つて『サー官員サン寫して貰ふぞへ』と腮を突出し、兩手を膝の上に重ねた。

絶體絶命、**モデル**の押賣、今更厭とも言へない、**スケッチブック**を出して簡單な鉛筆寫生、赤いのや青いのやを塗つける、どうしたハヅミか顔がよく似たので、當人よりは兩親の方が大喜びだ、手帳から引裂いてやる。

寒い朝で、池の氷は二寸も厚さがある、戸外は眞白な霜だ。前の山に上ると富士がよく見える、雪は朝日をうけて薄紅ゐに、前岳はボーと靄が罩めて、一樣に深い〳〵色をしてゐる、急いで寫生する。

寫生が終つて、不圖西の方を向くと、木立の間から雪の山がチラと見える、思ひがけない、もつと高い處をと見廻はすと、茶屋の後ろに大きな草山がある、氣もそゞろに駈け上る、元より道は無い、枯草を分け熊笹の中を押してゆく、足元から俄に二つの兎が飛出す、そんなものには目もくれず上へ〳〵と進む、汗はタク〳〵流れる、熊笹は盡きて雜木の林になる、蔓が絡む、茨の刺は袖を引く、草の實は外套から**ズボン**から、地の見えぬ迄粘りつく。

辛ふじて可なりの高處へ出た。榾の根元の草の中に三脚を据へる、前に見えるのは惡澤と赤石で、右に近いのは御馴染の白河内らしい、他は近處にある小山に遮れて、殘念ながら目に入らない。

二時間程にして山を下つた。『官員サンの黄八丈は、草の實が一ぺエだ、俺らハタいてくれるぞよ』と**よしえ**は丈よりも高い箒を持つて來た。

圍爐裡の側で晝食をたべる、昨夜と同じ里芋汁だ、昨夜も今朝も、薄暗らかりの何共思はなかつたが、晝間見ると、茶碗の底に泥が沈んでゐた。

二十二

池の茶屋を出たのは一時過であつたらう、これからは平凡な下り道ではあるが、荷が重いので休み〳〵ゆく、道には野菊蔓龍膽など、あまた咲き亂れて美はしい、彼方是方に落葉松の林を見る、奈良田のそれに比して色劣れど、筆執らまほしく思はるゝ處も少なからずあつた。池の茶屋より二里あまりにして、四時頃平林の蛭子屋（ゑびす）といふ宿に着いた。

農事に忙しい時嫁は風邪で寢てゐます。一向お構ひ申されませぬとクド〳〵言ひながら、六十ばかりの婆さんが洗足の水をとつてくれる、通されたのは奥の十疊、昔しは立派な宿屋らしく造作も惡くはない。

座敷の正面には富士が見える、よく晴れた夕で綠色の空に浮出

した白雪は紅色に染められた、刻一刻、見る間に色は褪せて、うす紫に變るころには、空もいつか藍色を增して暗く、中天に輝やく二三の星は、明日も晴れぞと、互に瞬して知らしあつてゐる。

膳を運び、飯櫃を運んで來た婆サンは、『どうぞよろしく』と其儘引下がつた、見ればこれも舊式の、平もあれば壺もある、さすがに汁には泥も沈むでゐない、快よく夕飯を終りて、この夜は早くより寢床に入つた。湯島では一日に二度宛も入浴した罰で、今晩も風呂は無かつた。

二十三

十三日はうす曇りであつた、富士は朧ろげに見える。

平林の村は、西と北とに山を負ふて、東が展けてゐる。村の入口から出口迄ダラ〳〵の坂で道に沿ふて川があるため、橋の工合、石垣のさま其上の家の格恰、樋、水車なむどが面白い。下から上を見ると、丘の上に寺があつたり、麥畑が續いたり、處々流れが白く瀧になつて見えたりする。上から下を臨むと、村の盡くる處には田が在る畑がある富士川の河原の向ふには三坂女坂などの峠が連なつて、其上に富士が見える大きな景色もあるが小さな畫題は無數である。

鎭守の鷹尾神社にゆく、二百階も石段を登ると本社がある、甲州一と里人の自慢してゐる大杉が幾株か天を突いて鳥一つ啼かぬ神々しき幽邃の境地である。

社前に富士を寫す。直ぐ前の紅葉せる雜木林がむづかしい。去つて村の水車の傍で、白壁の土藏を寫す。

夕方宿へ歸る。農家の忙しい時で、家には誰れも居らぬ、草履を脫ぎ座敷へ戻つても、火も茶も持つて來ない、御爺の歸つたのも知らぬからで、暢氣なものである。

翌朝は天氣、居ながらにして見る富士は美はしい。嫗さんは朝のお茶受にとて、花見砂糖を一鉢持つて來た。

二十四

十四日の八時半、平林を發足して、山際を川に沿ふて下ると、一里ほどで春米といふ村に出た。人家二三十、道路山水としては格別面白くはないが、川沿の柳の色がいかにもよいので、三脚を据へた。

川には殆と水が無い、其岸にある四五本の柳は、明るいオレンヂの色をして並むでゐる。背景は甲州盆地の平原で、低い山がうす霞むで、ほむのりと紅味を帶びた空は山にも木にもよく調和してゐた。

何處を見ても物の色は佳い。暗く影の深い鎭守の森、白く日に光る溪川の水、それを彩るものは秋の色である、高くもあらぬ西山の頂きは、若早冬で、秋は此麓の一劃に占められてゐる、道もせの草にも其色はある。

青柳の町を、遙かに左に見て、堤の上をゆく、槻の並木の色は比ふるものもない美はしさである。堤の盡くる處に橋がある、鰍澤の入口でこゝにまた柳を寫生した。

粉奈屋へ歸つのは午後の二時。

富士川通舩の出るあたりに往つて見たが、繪になるやうな場處は無い。

十五日は曇つてゐた、七時半に馬車へ乘り、甲府へ向ふ。白峯はチラ〳〵頭を出す、乘合の人は、甲府の近處から越中の立山か見えるといふ。

甲府を十一時發の瀧車で東に向ふ、雲が深くなつたので白峯は見えない。沿道の紅葉は少し盛りを過ぎたのか、色が悪い。

汽車の窓から外の景色を見ると、どんな處でもよく纏まつて見える。窓一つ〳〵が立派な繪になる、すると、甲府から東京迄、何萬枚の繪でも出來さうなものだが、さて汽車から下りて見ると、繪にする處は存外少ない、何故であらうか。

車窓から見て、何處でも面白く感ずるのには、種々な原因がある、一つ〳〵繪に見えるのには條件がある。仕切りのあるといふこと、速く走ること、遠くを見る事で、汽車が停まつてゐてはあまりよく見えない、仕切のあるのは、見取枠から見たやうに、圖の散漫を防ぐ。速に走るために、いつも主要ものばかり目に入つて、細かいウルサイ物は、見る間もなく過ぎ去つて仕まふ。距離が遠いために、深味、即ち奥行が充分で、自已の位置が高い爲めに、廣い場所が見え、それが車の速力で、よく纏まつて見えるからであらう。こんな事を考へてゐるうち、いつか汽車は新宿に着いた。（完）

* * * * *

關西美術會展覽會を觀る

大下藤次郎

關西美術會はこの秋第九回展覽會を京都岡崎の美術館跡で開かれた、私は丁度小豆島に寫生旅行にゆく途次、鹿子木寺松諸兄の御案内をうけて一覽した。

會場は東京の竹廼臺陳列舘には劣るが、光線の工合も佳良で、陳列場として惡くは無い。繪畫の出品二百四十五點のうち水彩畫は九十六點あつて中々盛むである。

僅々三四十分間の瞥見に過ぎぬから批評は出來ぬが、其際感じたことを少しく陳べて見やう。

由來關西に於て、殊に京都に於ては、故淺井先生の瀟洒にして、淡白なる畫風の感化と、日本畫の影響とにより、關西の水彩畫といふと色の貧しい調子の弱いものばかりであつた、然るに東京博覽會、次ては文部省美術展覽會の開催によつて、關西の人の畫に對する考は變つて來た、枯淡貧弱なものでは展覽會場に他から蹴落される、次には鹿子木氏の力強い畫風は大に刺戟を與へたため、漸次輕い調子が漸く重くなつて來た、筆先の技巧より脫して一步進んで自然に對し眞面目な研究的態度が現はれて來た、今度の展覽會には其徵候を充分認むることが出來る、私は關西畫界の前途に多大の望を囑しつゝ會場を出でた。

（十一月四日）

春鳥畫談

汀鷗

初學の人は、自分で花を活けたがるよりは、他人の活けるのを熟視して居た方が進歩が早いと、有名な活花の師匠が言つた。勝手もよく分らないうちから、目的（あて）なしに寫生をやるよりも、先生の描いてゐる處をよく見た方が利益は多からう。

併し、繪は活花とは違ふ、形式の極まつてゐる單純のものではない、教師が生徒のために、特に解りよいやうに、順序を踏むで、所謂寫生の型（かた）を見せる時は別として、普通大家の寫生してゐる所を見たからとて、あまり初學者に益はあるまい。

益の無いばかりか、害のある時もあらう。寫生する時は、目に見えたある者も取除けることもあらう、丈高い樹も構圖の上から低くする事もあらう、赤く見えた雲も紫に彩らぬとも限らぬ。筆者は心あつてする事だ、それを心あつてやるのだと見ればよいが、初學の人にそんな事は分らない、多くは赤く見えた雲は紫に描くもの、丈の高い木は低くするもので、それが立派な繪を作る秘訣であるかのやうに思ひ込むでしまふ。

藝術は教へることも困難、教はるのも困難だ。教師に言はれた通り、幾年も氣永にやつてゐれば上手になるかといふに、さうも限らない。技術の熟練は輕視すべきものでは無いが、藝術にはそれよりもまだ貴いものがある。

習ふより悟れ。早く悟つた人が早く上手になる、併し、悟るにはまづ多く描かなければいけぬ、多く觀なければいけぬ、多く聞かなければいけぬ。多く描くうちには出來不出來もあらう、過ちの功名もあらう、よいつもりでゐて失敗した作も出來やう、それ等の貴い經驗は、悟りを早くさせる手段である。多く觀るうちには、繪の良否を鑑別する力が出來る、その力は、やがて自己製作の上に影響して、これもまた悟りの道の開から。多く讀み多く聽く、これによつて先人の苦心も知り、現時の思潮も分らう、自己の向ふべき針路も定まらう。

往昔の畫家には無學者が多かつた。常識の不充分な人でも、往々成功した、これからはさうはゆかぬ。

繪に志すのは早い方がよいが、ほんとに修業にかゝるのは中學卒業後でよい。今の教育は、中學卒業者には寫生の方法位は教へる、それで專門家にならうといふのには、中學教育を受けてゐるうちに、夜でも研究所へ通つて木炭を摑むとか、日曜だけでも畫事に親しむやうにしたらよからう。

教へる方から言つても、教育のある人の方が悟りが早い、分りがよい、夫ゆへ進歩も早く教へるのにらくである。

繪を學ばうとする人は、あまり書物など澤山見ないで、早くから教師に就いた方がよい。案内書のやうなものは、一通り目を通すのはよいが、もとより書物だけで繪が上手になれるものでないから、何も角もこれにもつて解決を求めやうとするのは間

違だ。

物は何でも初めが大切だ。最初に就いた教師が悪いと、一生の損だ。教師は必ずしも第一流の大家でなくともよい、品性の高い、公平な、親切な人であつて欲しい。

昔しは、銘々の主義や流派を貴ぶのあまり、弟子が他流の眞似をしたといふて、破門した例も澤山ある。繪といふものは、そんな窮屈なものでなく、種々なる畫風があるので面白いのだ。人には各々異なつた性質がある、其個性は必ず繪の上に現はれる、それを押へつけて、自己の流義に從はせやうといふのは無理だ、天才はかくして往々埋沒せしめられる、繪の教育は、兵隊や師範の生徒を訓練するのとは異ふ、同じ鑄型に箝められては耐らない。

このやうに、個性は極めて大切だが、苟くも造形技術である以上、一通り極まつた法則はある、自己といふことの見出せる迄は、やはり誰れでも其法則に從はなければならない、大なる自由を得るためには、相應の束縛を甘んじて受けなげればならない。

銘々の個性に向つて尊敬を拂ひ、同時に繪の約束を親切に教へ邪道に入らぬやう注意して導く教師は、眞に理想的である。

繪の教へ方には幾通りもある。初めから繪を畫くことを教へるのも一の手段である、繪を畫くための基礎から教へてゆくのも一の方法である。前者は一寸摑へ處がないから入り悪いが、出來たものは已に繪になつてゐるから面白い。後者は所謂稽古で出來たものは極めて無趣味だが、學ぶのには苦しみが少ない。天才と言へぬ迄も、器用な人には前者の方が早く進むであらう。素人藝として習ふのにも、前者の方が結果はよいかも知れない。眞に深くやらうというには、後者を選ばなければならぬ。

一つの石膏の首を、一週間も突つき廻すのはあまり面白いことではないが、これが他日大飛躍する基礎になるのだ、また素人の慰みとしても、後者のやり方が安全だ、これなら文字の書ける人には誰れでも出來るのである、そして堅實の基礎の上に築かれるのだから、仕事に危な氣がなく、出來たものは確實だ。一點一劃、少しの濃淡の調子も間違へぬやう、頗るアガテミックの稽古を半日やつて、午後から野外に出て、自由放奔に、感情の向ふまゝの仕事をする、一方に基礎を固めつゝ、一方に元氣を横逸せしむるやり方は、理想的修業の手段であらう。

圓い花を圓く畫いたのでは面白くない、圓い花を四角にかいてこそ味ひがあるといふ。圓い花を四角に畫いて、觀るものに圓い花と思はせるだけの技倆、否圓いとか四角とか、そんな事を考へさせないだけの立派な技倆のある人にして、始めて味ひも趣もあらう。圓い花は元より圓く畫いて差支はない、圓い花を四角に畫くものと極めるのは悪るい、圓い花は圓く畫くものと極めるにも及ばない。

繪は粗く畫くものだといふ、粗く畫いて充分感じが出ればそれでよい、併し細かく畫いても調子が整へば、イクラ細かくても差支はない。筆使ひの粗密は、對象によつて相違も出來やう、また其筆者の性質にもよらう、どちらでもよいわけて、一方に極めるには及ばない。

素人が繪の習ふのには、鉛筆から始めて、一色畫をやつて、それから彩色に移るのがよい。描き方はいろ〳〵あるが、初めは何でも見えた通り正直に寫したらよい、寫眞のやうだといはれても構はぬ、正直といつたとて、何も木の葉を一枚々々寫すといふのではない、形や何かを正直に寫すのだ、さうして物の性質を畫き現はす稽古をして、それが可なり出來た頃に、教師は物の感じを出す手段を教へるがよい、生徒もまた、その時分には、博物の標本みたやうな畫に飽きて、自然に工風して、大膽に着色したり、粗い筆も使ふやうになる、何でも自分から出た手法でなくては面白くない。

稽古の時は、頭を冷くして、物の内部迄も究むるといふやうに、極めて客觀的に物を寫す、飽迄も自然を手本にして忠實に寫す。繪を畫く時は、自然に束縛されることなく、自己の主觀によつて、物を活かし、働かし、自然以上の或物を表現させる。

こんな風に甘く使ひ分けが出來たら結構だ。

自然に忠實にといふと、たゞ外面の描寫に忠實だけで、必竟は自然の模寫に終る。大膽にといふと、いつか自然を忘れて粗笨に流れる。忠實な仕事の出來るだけの素養を持つてゐて、大膽の仕事をすれば面白いものが出來やう。

文字を習ふのに、片假名から平假名に移る。楷書をやらせて、行書草書といふ順序だ。畫もやはり、片假名楷書から入る方がラクだ、楷書を書く力の無い人の草書は、とかく宛字やゴマカシが多い、書を知らぬものは褒めもしやう、心ある人は顧ない。

世に書家と許されてゐる程の人が、サンズイ（ニスイ）のシをンに書いても人は咎めない。小學校の生徒が、ニンベン（ギョーニンベン）のイとイを間違へたのでは教師は許さない。修業中に大家の眞似をしても駄目だ。ナグリ描きで立派なものが出來るのは、素養があるからだ。修養の足りぬ人がやつたのではタトへよく出來てもそれは僥倖に過ぎない。

心理學者に言はせると、人間は幼時から、一度見たもの聽いたもの、すべて五感に觸れたものは、必ず記憶してゐて、ある機會に現はれるものだといふ。繪でもさうだ、一度畫いたものは、次に畫く時は、たとへ意識しなくとも、必ず記憶があつてラクに出來る、見たもの聽いたもの、何れもさうだ、やはり多く畫き多く視多く聞くに限る。

骨折つて仕上げた一枚の繪も貴いが、前に澤山骨折つたことがある、即ち修養のある腕で、無造作に畫いた繪も貴い。一は骨折が誰にも見える、一は骨折が隱れて見えぬが繪としては後者

の方が成功してゐやう。

幾日も幾月もかゝつて製作したものも繪なら二十分三十分のスケッチも繪だが、美術としての約束を備へた所謂『繪』といふものと、研究のためにやつてゐる所謂『稽古繪』といふものとは、區別があつてよからう。ある景色に對して寫生をする、其出來上つたものは繪といはれるが、稽古にやる寫生なら、何も出來上らせなくともよからう、突つき散らして眞黑にしてもよい、半分でやめてもよい、それは繪をかくために稽古するので、手習草紙のやうなものだ。

手習草紙であるから、思ひ切つた事をやつた方がいゝ。この處はもつと暗いやうだが、暗くすると、折角これ迄出來た調子を破りはすまいかと、臆病な心を出してはいけない、これも稽古だと思つて、何處迄も突込むでやらなくては駄目だ。

手習草紙なら、汚れもしよう、美しくもなからう。他人が後ろに立つて見てゐても構はないではないか、百性や小學校の生徒に氣兼して、着けやうと思つた繪具を控へて置くなどは、極めて愚だ。

稽古繪である以上は、一枚描いたら、それだけ何物か得る處がなくてはならぬ、何か悟つた處、覺えた處が、無くてはならぬ、つまり其繪の中に、研究の痕跡がなくてはならぬ。無意味に無考に描き散らしたのでは、何百枚寫生しても進歩のありやうがない。

あらゆる藝術には、獨創といふことが大切だ、他人の糟糠ばかり嘗めてゐたのでは、いつ迄たつても頭は擧らない。迷ふのはよい、大きく迷つて、出來るだけ苦しむで、行く處迄行つて悟るがよい。赤い色を見ては驚き、青い色に逢つては心を動かすといふやうな、小さな迷は大禁物だ。

繪の事を一通り覺える迄は、自我は出さない方がいゝ、教師の言ふ通りやるがよい、併し、いつ迄も教師の言ふ事ばかり聞いてゐるのは愚だ、自分が分つて來たら、そこに迷ひが出やう、研究心が深くならう、教師の通つた道よりも別の道が見出されやう。

教師より上手になれぬ位ひなら、初めから教師に就かぬがよい。先生のやうに書けたらなど言はずに、早く先生以上のものを作りたいと心掛けるがよい。

教師もまた、いつ迄も自分の弟子が、自分より下手であつたら大なる恥辱だ、自分も怠らず勉強するがよいが一日も早く、弟子を自分よりエライものに仕上げなければ嘘だ。

生活とか將來とか、そんなことは一切夢中の、何でも繪が書いて見たいので、畫家にならうと焦る人がある。自分は一寸繪が書けるから、これで何とかして生活しやうと、世渡りのために畫家にならうとする人もある。有名な人の華やかな位置を羨むで富も得やう名も得やうとの慾から、畫家を志望する人もある。

繪を描くことが飯よりも好きな人、こんな人の中には、下手の横好といふて、到底見込なしと思はるゝ連中も稀にはあるが、兎に角一番頼母しい、志した事に傍目もふれず勉強する、よし天才でなくとも、このやうな人達は、飽かず勉強するといふ點から、往々大器晩成といふやうな、熱心の産物が現はれる、元來好きな道であるのだから、道具の不足も言はない、貧乏は平氣だ、世間に動かされないで、自分の信じた道を何處迄も通すといふ勇氣もある、これが頼母しい。

生活のめたに繪を習はうといふ人は、存外多い、病身だから、繪でも修業させやうといふ親の心、腦が悪いから繪かきにでもならうといふ子の考へ、何の事はない、美術學校を病院と心得てゐる連中は此組だ。元來が嫌ひな仕事ではないから、繪でもといふので、若し他に面白いことがあれば、いつでも商賣換をやる、途中で厭になる、他の誘惑に陷る、大勇猛心が無いのだから、生活の道さへ立てばそれで滿足する、新聞社に入つたり、學校の先生になつたりして、其當時こそ、他日大に爲すあるやうな事を言ひながら、つひには其儘に終るのは此人達で、商賣的の肖像畫家となるのも多い。

榮達を目的としての畫家志望者は、十中の八九で、名譽といふ言葉は、大に奮發心を起させるものだから悪くはない、若い人達の心を刺戟するには、此上もない有効なものである、少なくとも、他に比して、天才と呼はるゝ人達が此方面に多い、中には所謂田舍天才があつて、偶々雜誌の懸賞コマ繪に當選したり、師から褒められたりすると、天狗になつて中央に押出す輩もある、このやうなのが、實地にやつて見て存外六つかしいのに失望して、いつとはなしに志望も碎けて、今更他に方向を轉ずることも出來ぬので、グツ〳〵に一生を終るのもある。

名を得たい、富を得たいために、世評に動かされて、心にも無いものを畫いたり、素人好のする繪で、顧客を求めるといふやうな、卑しい事もやらぬとは限らない。

何よりも繪が好きで、描きたいから畫くといふ人は、畫家となり給へ。飯を食ふためにといふ人は、宜しく他に生活の道を求めて、好きならアマチユアとして樂しんだ方がよい。名譽や富貴——畫家に富貴は殆と望めないが——が目的なら、まづ自己の力をよく考へてから此道に入るがよい、其方の才分も足りないで、焦つた處で、決して目的は達せられない。

身體の弱い人が、繪を始めて——風景畫で——壯健になつた例は無いでもない。又所謂、蒲柳の質で成功した人も無いでもないが、繪といふものは身體が弱くつても成功するものと思つては間違だ。弱い人は精力が續かない、友達と同一程度の勉強が出來ない、大切な忍耐力持續性が乏しい、學友間の競爭に耐えられない、社會へ出てからも力一ぱいの仕事が出來ない、何も相撲取のやうに大きな身體も入らないが、畫家となるのは氣樂なものではないから、病人では決して成功しない。

併し、病人でも資産が澤山あつて、遊びながらやらうといふのには、繪は一番よい娯樂だらう。

生活のために繪を畫くな、繪を畫くために活きよなんてよく言ふことだが、畫家も人間である以上、物を食はずには活きてゐられない。最初から飯の種に繪を習はうといふのは、美術家となるのでなく職人となるのだ、美術といふものを侮辱した話だ、そんな人達は論外として、眞に繪が好きで、稽古をするにしても、種々な事情から、繪で毎日の糧を得てゆかなければならない事にもならう、眞の目的が繪である以上は一向差支はない、版下も畫くがよい、會社へも出るがよい、學校の先生になるのもよい、此際大決心があつてやるならよい、若しいつ迄も生活から離れることが出來なくて、モガキながらも其儘で終つて仕舞ふなら、いかに立派な言譯があつても、最初から飯の種にしやうとした人達と、結果に於て格別變りはない。

大なる志を抱きながら、衣食のため地方の學校に往つて、面白からぬ其日を送つて居らるゝ人達には、心から同情する。境遇なら止を得ない。このやうな人は、宜しく自己現在の地位を利用して、大に修養し、心靜かに他日の再生機會を待つがよい。學校に居ると、存外時間の少ないものだといふ、併し、何といふても畫學の教師であつたら、下調や何かに大して面倒もあるまい、タイヘ朝から晩迄學校に居るとしても、出勤前の一時間位ひは研究の時間もあらう、自分の力で買へない書物も見ることが出來やう、參考品は自由に利用されやう。

在勤の場處が無趣味で、繪をかく氣になれないといふ人もある、元々感興的のものだから、面白くない場處を寫して傑作を得やうといふのは無理だが、感興を惹かないといふことは言へても畫く處が無いといふのは嘘だ、こんな人に、君の居る處では空は見えませうね、空には雲も出かませうねときくと、監獄に居るのではないから、マサカに空も見えないとは言はない、空が見えたら雲の研究をしたらどうだらう、毎朝の一時間、空を寫生して見たまへ、四季によつて異ふ、方角によつて異ふ、毎日〳〵必ず同一の現象といふことは無い、其變化の多い雲は、極めて好個の研究材料ではあるまいか、それも出來ないといふのなら、其人は、やはり初めからパンのために繪を習つた人だ、繪を飯の種にする人だ。

厭々仕事をするといふことは、其仕事のために不忠實ばかりでなく、自分の品性を低くする、健康にも害が在る、境遇上自分の好まぬ仕事をしてゐても、他に大なる希望があつたなら、嫌ひな仕事も苦痛にはならない筈だ、厭な爲事の中から、自己の修養になる或物を見出すやうしてはどうだ、何かその境地から趣味を求め出して、愉快に仕事をするやうに心掛けてはどうだ、少なくとも其厭やな仕事から離れて、即ち自分の仕事を客觀しつゝ、無頓着にやつて居てはどうだ、現在の境地に不足を言は

ずに、絶えず發達進歩を圖るといふことで、其心さへあれば、不愉快なしに日が送れて、其上いつか希望の達せられる時機が來る。

いくらよい機會が舞込むで來ても、こちらにそれに應する準備が出來てゐなければ、機會は待つてゐてはくれない、捕へ損ふ、いつでも來いといふやうに、仕度を充分して置くがよい。

朝鮮の俚諺　（帝國文學）

△幼い子供の言葉も耳から逃すな。

△畫に志す人は何物にも注意を拂つて自己のものとするがよい。

△下手な料理人は朴の木の俎板を怨む。

△スケツチブックは絶えず手から放すな。

△甘く行かない時には先祖にかづける。

△紙の故にする、繪具の故にする、筆の故にする天氣の故にする、教師の故にする。但よく出來ただけは自分の故にする。

△澁い梨でも嚙みしめて見るものだ。

△辛抱して畫いてゐると、出來損いと思つた繪が存外面白いものになることがある。

△釜の中の豆も煮てこそ熟す。

△一寸やつて見て飽きてしまつてはいつ迄たつても生煮だ、よく熟すまで續けるがよい。

△馬鹿にした草で目を突く。

△狩れた斧にも足を截る。

△こんな處かと輕々しくかゝると却て甘いものが出來ない、獅子は兎一匹にも全身の力を用ひるといふ。

△花鉢に植ゑると描ヂヤラシも植木だ。

△額緣に入ると出來損ひも繪になるかネ。

△横這ひに往つても京城迄往かれればよろしい。

△描法なんか構ふな、目的さへ達すればよい。

△十二の才藝のある奴が朝夕の煙を立てかねる。

△何でもやりたがるものは一事も成功しない。

△狂人が虎を捕へる。

△向ふ見ずにやる奴も時として傑作が出來る。

△虎の居ない時には狐が先生。

△田舍へゆくと狐のやうな大家が澤山ある。

△烏が十二の聲音を弄しても一つとして善い語はなし。

△もと〳〵才分の無いものがいくら骨折つてもよい畫は出來まい。

△瓦一枚惜むで棟木を腐らす。

△少しの繪具を惜むで其繪は出來損ひ。

△空を掠めて往く鳥も初め體を動かしたればこそ飛べるのだ。

△いきなり上手に描けるものではない。

＊　＊　＊　＊　＊

寄書

横濱の水彩畫展覽會を見る

絹糸のような秋雨の降る十七日の午後、昨日から老松小學校に開催された日本水彩畫展覽會を見に行つた、先づ足を第一室に入れると、其處は支部會員と大下講師の作品が皆で七十四點列べて有る、づうつと見た處田中太郎吉君の作品が一番佳作で『豐顯寺の森』や『山手居留地』などは中での佳作だが、後者の手前のドブ石は石の感じがないと思ふ、『御嶽の秋』は氣持の善い畫、『秋の暮』も面白かつた、高畠君の『甲州駒ケ岳』は非常に善い作だ、『釜無川』も善かつたが山が少し重く見えた、保田君の『初秋』は面白く、『奈良の雨』は柔かい筆で、輕部君の作品には熱心に研究した跡が見えた、『小川』が善かつた、鷹野さい子君の『朝顏』は一寸面白く、平野君のでは『久保澤の秋』が善い、跡のは皆餘りぞんさいだ、聞けば未だ初めてだ相だが、上手な人達の達筆を初歩なのに眞似するのは餘り善くない、あく迄忠實に描いたのが爲になると思ふ、小林君の『靜物』は善いが『仲秋』は餘り好ましくない、形も不充分だし色も不快だ、全體描法が善くないと思つた、佐羽君の驛路は面白い作だが道が餘り平たくて板の樣で有つた、大下講師の出品は二十一點の多數で、皆々熱心な寫生畫許りて後進者の參考に成つた。

第二室に入ると、其處は東京研究生出品と參考品が數枚有つた、奥村博君のお茶の水は小品で有つたが善かつた、八木君の『富士』はキレイに遠近が取れて描いて有つた、赤城君のでは『箱根』はスケッチだが中々達筆で有つた、相田君の『能面』には實に驚いた、前の白い面なんか木を刻して出來て居る感じが申分なく出て居た、無暗に圖許りよつて描くより、此樣なものを描いて其物質を出す可く研究したが善いと思つた、『檜原湖』善く色が出て居たが舟はなくもがなとの評判で有つた、水野君の『町はずれ』は町はずれの感じが善く出て居た、水野君は好んで此樣な場所を描く樣だが、それが又非常に善く感じが出る、寺田君の『冬の午後の日影』は氣持の善い畫だ、手前のシメツた河原は暗くて杭の半分に日がパツト當つた處と橋の影が取わけ善かつた、『隆慶橋』はより以上の佳作と思ふ、風が吹いては小波が立つた感じなんが實に善く出て居た。參考品中の中川氏の『入間川秋の夕』は、ポツト霞んで遠くに白い煙りが二ツ三ツ登る善い畫だつた、茨木氏の『古驛』は面白い描法、初めて見る時は驚くが善々見て居ると面白味が出てくる、中澤氏の木會寐覺の床』は、月影で柔い畫だ、河合氏の裏街道は淋びしい色でをちついた畫だ、また丸山氏作品は多く大作で有つたが、唯きれいキレイと思つたのみで外になにも頭に殘らなかつた、最後に故淺井忠氏の『カレイ村』(佛蘭西の秋)を見て實に其描法の善い密な色の善い暖かい好い畫であの位いに研究しなければ駄目だなと唯々敬服の外はなかつた。

夕暮近く會場を出て、追々考へた、新らしい頭で新らしい描法を用いて進んで行く若い青年畫家の前途は希望に滿ちてる、

其の勇ましい進歩を見て、今の所謂大家連中も大家の名に安んぜずして『なに若い者なんかに敗けるものかと云ふ位いに、うんとヘビーを出して奮つて研究して貰いたい』と思つた。霞生

畵趣に富みたる淺間社

在清水　清茂生

靜岡市へは清水港より、鐵路十錢行程三里です。市の風致は駿府城趾、安倍川、及び淺間社です。けれども其隨一は、淺間社でせう。日光を見ざれば、結構といはれずといゝますけれど僕は實際見て、却て失望しました、これは人々のいゝふらしのえらい割合に、社殿も狹小に、且つ色もあまり、華麗ではなかつたからです。

僕は、今迄參拜した社の中で、此社ぐらい、何かと畵味の調ふて居るものは、先づないです。第一心地よいのは、境内の狹くるしくないことです。老樹の多いことです。背後に古杉鬱蒼たる山を負ふて居ることです。第二に社殿の壯大なことです、建築物の數の多いことです。第三に社殿の丹精其他が、古雅蒼然たることです。一たび足を此地に入るれば、神韻先づ人を襲ひます。

社は今より一千餘年前、聖武帝の御宇の創立とやらです。今の社殿は、德川中葉以后の建立です。社格は國幣中社、三面繞らすに、青苔紫蘚斑々たる、石の玉垣を以てします。他の一面は、即ち森々たる山なめです。先づ石の大鳥居を入ると、石造下馬橋があります。それを渡つて、丹塗銅瓦の二王門（維新の際二王だけは佛なればとて他へ移されました）があります。それから敷石の上を通つて行くと、群鳩の羽音高く飛び交ふのを見ます。さて前方には、長き廻廊がありまして、風雨にさらされたる瓦の色面白く、欄間に掲げられた奉額の色亦愛すべしです。中央なる朱色二層の樓門をくぐりますと、今度は稚子殿です。これは白木造りですが、しかし今は中々雅色豐です。拜殿は十三間の丸柱、殿宇高く蒼穹に聳え、形態色調亦頗る佳です本社は數十階の石段上にありまして、彫刻等美麗精致なものです。

此外又、俗に百段と申します百の石段を杉樹の影を踏みつゝ登りますと、こゝは眺望頗る佳、近隣郊野一眸の下に集りますこゝにも亦、丹塗の一社があります。此外大歲御祖の神曰く何曰く何と、重要建築物の數が、總てゞ十棟程あります。何しろ德川家指揮の下に出來たものですから、たしかにけち臭くないのです、そして又、久能山以上です。

僕此夏五日間此社に寫生いたしました。當地山本氏は、極めて熱心なる寫生家ですが、淺間に關する寫生、百點以上はされたといふことです。此一事でも、いかに畵趣に富めるかが推測できます。諸君或は來岡の機を得給はば、一たびはこゝに、彩管を洗ひ給へ。

* * * *

□本號は臨時增刊にして、初めは白峰の麓たゞ一編だけにて一部に纏める考なりし故、特別號として送料を要求致し候へども都合により普通號と改め申し候につき、代價は平生の通りにてよろしく、既に送料御拂込の方は、次の御送金の際御差引相成度候

□特別讀者は別に一冊分御拂込被下候へば難有存候

□本號挿繪は、四枚共白峯の麓旅行中の所作にして『落葉松』と『堤の柳』は八寸に一尺二寸、他の二葉は一尺に一尺五寸大に御座候

□前號『鰍澤の秋』も當時の寫生に御座候

□挿入の原色版は、每度申通り、田中製版所に於て特に秀でたる技倆を有する唯一人の技手の手に成るものにて、氣候の關係仕事の繁閑により多少の出來不出來はあれど、其不出來なるものにても決して他の雜誌の口繪に劣らぬことゝ自信致居候。またその製版順序は、二三ヶ月前より原畫を渡し置き、製版に着手し、不出來の時は更に版を改め、本誌發行迄に印刷致すことに相成居候、されど時としては、校正は立派に仕上りても、天氣都合にて用紙の伸縮等あり、印刷の出來上り不結果に終ることも有之候、さて印刷濟の上は、たとへ多少不結果となりし時にても、高價の製版畫を取捨つることも出來ず、時日の上に代りのものを急造することも出來ず、編者に於て不滿足ながらも不得止挿入發行致候次第に御座候、或る讀者は、不出來なものは載せぬがよいとの御注文なれど、これ現在製版術の幼稚なる時代に於ては萬止を得ざる事にて、左樣に嚴重にしたなら每月一枚の挿畫を出すことさへ六つかしく又た左樣な贅澤も許されまじく候、何卒前記の諒合を御含み有之度候、勿論不出來不滿足と申も比較的の話にて、全然原畫と相違して居ると申にも無之候、何も一々紙面に斷りをいふには及ばねど、不出來のものを上出來らしく風聽するは好まぬ故これ迄書添へしに過きす候

□冬期水彩畫講習會は概略左の通り決定致候、宿所其他は次號に發表可致候

一會　場　靜岡市物産陳列館

一期　日　四十四年一月三日より七日迄間晝夜

一課　目　水彩畫に關する實技及講話（戸外寫生を主とす）

一講　師　大下藤次郎氏

一會　費　金壹圓（會友と雖も割引なし）

一申込所　靜岡市安西南裏町七、比奈地畔川氏方及び本會

一申込期日　十二月二十日

以上

□旅舍は用意し置くべく、多分一日三食五十錢内外に候

□一月八日は日曜日なれば在學の方にても七日迄の授業は差支あるまじく候

□繪具其他は靜岡市に販賣店あれど、出席者にして文房堂割引券御入用の方は送料を添へ本會へ御申出あれば進呈可致候

＊　＊　＊　＊

問に答ふ

■過去三年間一週に一度づゝ木炭畫を習ひしが、今は田舍に在つて野外寫生をなせど正確な研究が出來ぬ、かゝる境遇に在るものは如何にしてデッサンを正しく學び得べきや、若し石膏を求むるとせば何がよきや（越後の一女）◎木炭畫の素養が幾分でもあるなら、はやり石膏から研究してゆくがよい、東京赤坂高樹町菊地鑄太郎氏にカタログを請求すれば形狀や代價はそれで分る、初めは女や小兒よりも老人がよい、羅馬希臘あたりの正しい形式のものがよい、白布其他の靜物寫生もよい、たゞ飽く迄も正確にやらねばならぬ■二　チューブ入繪具は長期保存するも變色せぎるや四　水彩畫は獨習書によりて學び上達し得るや、又何といふ書がよきや（SH生）◎一　鉛筆畫には輪廓をとるのにHB印、實線を畫くにはBB印位ひが適當なれど軟らかなら何でもよい、水彩畫の輪廓にはHBでよい二　製造會社による、和製品は請合へぬ、通常變色はせぬものなれど實は變つて硬くなるのがある三　鉛筆若くは木炭寫生から始める四　教師に就くことの出來る人は獨習書によらぬ方がよい、獨習書としては『最初水彩畫法』を勸める、それにしても畫いたものを誰れかに見て貰はねばいけぬ■一　小さき石膏類は二三倍に擴大して描きくの利害（藻峰生）◎一　時により擴大なることあれど、可相成は實物大、若くはそれより稍〻大きい位ひの處に止めた方がよい、あまり大きく畫くと部分々々に間が出來ていけぬ、また注意すべきは、近くで畫いた時と遠くで畫いた時と必ず其心持を異にしなくてはいけぬ、遠くで畫きながら、目や耳のよく見えぬ處をワザ〳〵近くへよつて見る人があるがあれはいけぬ、遠くでは遠くて見た丈けでよい

讀者の領分

■『靜物寫生の話』は我々初學者に有益なり、かくの如き講話の多く掲載せられんことを望む○本年廣島に講習會が開かれなかつたのは殘念の至り、來年は屹度開かれるやう廣島の篤志家の盡力をお願ひ申します（吳市今井哲三）■『みづゑ』口繪は製版不結果にして編者の不滿足に思はるゝものは全然廢されたい、偏に內容の健全を望む（愛讀子）■思實なる內筆水彩畫葉書交換を乞ふ（靑森縣八戶長根、須藤均）■『三脚物語』は益〻面白い何卒中絶なきやう願ひます（紀の國人）■B生君の御說同意君の御住所御姓名御知らせを乞ふ（兵庫縣揖保郡揖保村桑田義雄）■近頃『みづゑ』に中澤先生の御作が出るのは喜ばしい今後も時々拜見したい（一紅生）■橫濱支部の展覽會は非常な盛會であつた入場料も下足代もとらぬ、聞けば費用一切は支部の會員と大下先生との負擔であつたさうだ、それを知るとまた來年開いて下さいとお願するのは氣の毒だが、入場料を取つても每年お願いたしたいものだ（居留地の一給仕）

* * *

日本水彩畫會々友規定

一本會は水彩畫の發達及び普及を目的とす

一本會の趣旨を賛するものは何人と雖も會友となる事を得

一會友は自己製作品の批評を受くることを得べし

批評は一ヶ月一回三枚迄○作品には其裏面若くは別紙に寫生の月日、時間、其日の晴曇其他必要の説明及自己の姓名を明記すべし、是等の記入なきものは批評せず○作品は板紙に挿みて送るべしなるべくは桑田式を便利とす、巻きて送るものは其儘返送すべし○毎月二十日迄に送らるれば翌月十日迄に返送すべし○作品と同時に相當返送料を送らるべし、但一時に數回分納附するも妨なし

一會友の作品は鑑別の上本會展覽會に出品することを許す

一會友には本會の出版物を實費にて頒つべく其他本會と直接關係ある出版物の類は割引價格を以て頒つべし

一會友にして本會研究所又は講習會等へ加入する時は特別の待遇を與ふべし

一會友には一年數回本會特約彩料舗の物品代價割引券を贈るべし

一會友の望により一枚につき金五圓以上の擔保金を納むる時は本會幹部諸員の肉筆水彩畫を貸與すべし

貸與期限は二週間○圖柄及筆者を指定する事を得ず○遞送其他の實費として一回につき金五拾錢を前納すべし○擔保金は繪畫歸着後二週間以内に返戻すべし○貸與せし繪畫に損傷紛失等ありし時は擔保金を沒收し價格に不足を生ぜし時は追徴すべし○貸與請求は毎月二十日より三十日迄とす

一會友たらんとする者は入會證書、履歴書に記名料金壹圓を添えて申込むべし

入會證の用紙は半紙に限る、文面は適宜なれども必ず捺印を要す○履歴書には住所身分職業姓名年齢及學歴等を明記すべし

一會友は當分會費を要せず

一退會せんとするものは其理由を明記せし届書を出すべし但記名料等は返却せず

一會友は雜誌『みづゑ』直接購讀者たるべく『みづゑ』の購讀を中止せし時は退會と見做す

一會友は各自技術の進歩を努むると同時に、品性を高むる事を心掛くべし

本會は溫良なる紳士淑女の集合に成れる品格ある一團體として社會に立たんと欲す、故に會友は技師の進歩と共に品性の修養に重きを置かれたし

一會友に關する一切の事務は、東京小石川區關口駒井町大下藤次郎方に於て取扱ふ○會友よりの郵便物類も總て同所宛たるべし

以上

明治四十年十一月

日本水彩畫會

（後付の一）

日本水彩畫會廣告

■本會研究所は東京市小石川區小日向水道端町二丁目十六番地（服部坂下通り、電車江戸川線水道町停留場より二丁）にあり、毎日午前、夜、毎週日曜日終日、授業すべし、講師は河合新藏、岡精一、永地秀太、眞野紀太郎、磯部忠一、丸山晩霞、大下藤次郎諸氏なり

■安中支部は群馬縣安中町根岸方にて毎月一回授業すべし、講師は河合新藏、丸山晩霞の兩氏交々出張す

■橫濱支部は神奈川縣程ヶ谷小學校内にあり、毎月一回大下藤次郎氏出張授業すべし

■長野支部は長野市師範學校内にあり、毎月一回研究會を開き、年數回講師出張指導すべし

■飯山支部は長野縣飯山町森本香谷方にて毎月研究會を開き、年數回講師の出張あるべし

■關西支部は滋賀縣膳所中の庄藤田紫舟方を事務所とし、京都に於て毎月研究會を開く

■日本水彩畫會には地方講習生の設けあり、丸山晩霞氏主として通信授業をなす（當分休止）

■日本水彩畫會々友は作品の批評を受くるのほか幾多の便利と利益とあり、大下藤次郎氏主として其事にあたる

■研究所規定及會友規定御入用の方は往復ハガキにて申出らるべし但返信用の方へ宛名を記すべからず

以上

（後付の二）

本誌規定

發行日　毎月一回　三日

定價　一册送料共金二十五錢、三册金七十錢、六册金一圓三十錢十二册金二圓五十錢、見本一册郵券にて金二拾錢但號數の指定に應ぜず

會友　一時に金拾五圓以上を拂込むものには本會々友として日本水彩畫會々友と同一の待遇を與へ永久本誌の無料配布を受くる事を得

送金　前金のほか一切送本せず○前金切の時は包紙に注意すべし○代金拂込は振替貯金を望む○本會振替貯金口座番號東京六九六三番○郵便爲替拂渡局は必ず東京小石川小日向水道町郵便局○郵券代用は一册二十七錢の割

注意　代金の受取證を要するものは返信料を送れ○住所姓名を明記されたし○注文の際は第何號よりと明記されたし○問合せは必ず往復ハガキ

廣告料　一頁金五圓○半頁金三圓○〆切前月十日

明治三十八年六月二十九日内務省許可
明治四十三年十一月十七日印刷納本
明治四十三年十一月二十日臨時發行

（第六十九）

不許複製

編輯兼發行人　東京市小石川區關口駒井町三番地　大下藤次郎

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　藤本兼吉

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

發行所　東京市小石川區關口駒井町三番地　春鳥會

大賣捌所　東京市神田區表神保町　東京堂

明治四十三年十一月二十日かう志第六十九・明治三十八年六月二十八日第三種郵便物認可

S. TOMIOKA 1911